

東大道遺跡(A地区)

庄の原佐野線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

2004

大分県教育委員会

東大道遺跡(A地区)

庄の原佐野線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)



東大道遺跡 A地区遠景 南から



東大道遺跡 A 地区遠景 東から

序 文

本書は、県教育委員会が大分駅周辺総合整備事務所の依頼を受けて実施した県道庄の原佐野線建設事業に伴う、大分市東大道遺跡A地区の発掘調査報告書です。

大分市は、古くから瀬戸内海交通を通じて、九州の東の玄関口としての役割を果たしてきました。古代には豊後国府が置かれ、中世には大友氏による南蛮貿易で栄えた国際都市「府内」として、豊後国の政治経済の中心地でありました。

今回調査した東大道遺跡A地区は、大分駅の東南約2キロメートルに位置し、上野台地の北側裾の湧水点に形成された遺跡です。発掘調査の結果、弥生時代の溝や古墳時代の住居跡などを確認することができ、大分市中心部での貴重な歴史資料を得ることができました。

本書が埋蔵文化財の保護に向けて、また地域の先人の生活を理解する資料として、さらには学術研究の一助として活用されれば幸いです。

終わりに、長期にわたる発掘調査に御支援、御協力をいただきました関係各位に、衷心から感謝申し上げます。

平成16年3月31日

大分県教育委員会教育長

深 田 秀 生

例 言

- 1 本書は大分市東大道3丁目に所在する遺跡の調査報告書である。
- 2 発掘調査は県道庄の原佐野線建設工事に伴い、大分駅周辺総合整備事務所から委託され大分県教育委員会が実施した。
- 3 発掘調査は槇島隆二と阿比留士朗（大分県教育庁文化課）があたり、平成13年11月1日から開始し、平成14年1月31日に終了した。
- 4 現地での遺構の実測・写真撮影は調査員があたった。
- 5 遺物の整理作業は大分県文化課文化財資料室整理作業員が行い、遺物の実測・トレースは大分県教育庁文化課職員及び同資料室整理作業員があたった。
- 6 出土遺物ならびに図面・写真等は大分県教育庁文化課文化財資料室（大分市中判田1977）において保管している。
- 7 本書で使用する方位はいずれも座標北である。また、国土座標は2002年4月1日改正以前の座標値を使用している。
- 8 本書の編集・執筆は槇島が担当した。

目 次

第1章 はじめに	1
1. 調査の経緯	1
(1) 調査に至る経過	1
(2) 調査の経過	1
(3) 調査の体制	2
2. 遺跡の立地と環境	3
(1) 地理的環境	3
(2) 歴史的環境	4
第2章 調査の成果	5
1. 調査の概要	5
(1) 遺構の配置	5
2. 縄文時代の調査	5
(1) 出土状況	5
(2) 出土遺物	5
3. 弥生時代の調査	9
(1) 溝状遺構(SD01)	9
1) 遺構	9
2) 遺物	9
(2) 溝状遺構(SD02)	10
1) 遺構	10
2) 遺物	11
4. 古墳時代の調査	12
(1) 住居跡(SX01)	12
1) 遺構	12
2) 遺物	12
5. 包含層出土遺物	17
1) 石器	17
2) 弥生時代の土器	17
3) 古墳時代の土器	18
4) 近現代の陶磁器	19
第3章 まとめ	28

挿図目次

第 1 図	県道庄の原佐野線路線図と東大道遺跡A地区	1
第 2 図	東大道遺跡と周辺の遺跡	3
第 3 図	東大道遺跡A地区出土縄文土器実測図	6
第 4 図	東大道遺跡A地区遺構配置図	7
第 5 図	東大道遺跡A地区SD01出土石器実測図	9
第 6 図	東大道遺跡A地区SD01出土遺物実測図	9
第 7 図	東大道遺跡A地区SD02実測図	10
第 8 図	東大道遺跡A地区SD02出土石器実測図	11
第 9 図	東大道遺跡A地区SD02出土遺物実測図	11
第10図	東大道遺跡A地区住居跡(SX01)実測図	12
第11図	東大道遺跡A地区住居跡(SX01)出土遺物実測図1	14
第12図	東大道遺跡A地区住居跡(SX01)出土遺物実測図2	15
第13図	東大道遺跡A地区住居跡(SX01)出土遺物実測図3	16
第14図	東大道遺跡A地区住居跡(SX01)出土石製品実測図	16
第15図	東大道遺跡A地区出土石器実測図(1)	20
第16図	東大道遺跡A地区出土石器実測図(2)	21
第17図	東大道遺跡A地区出土遺物実測図(1)	22
第18図	東大道遺跡A地区出土遺物実測図(2)	23
第19図	東大道遺跡A地区出土遺物実測図(3)	24
第20図	東大道遺跡A地区出土遺物実測図(4)	25
第21図	東大道遺跡A地区出土遺物実測図(5)	26
第22図	東大道遺跡A地区出土遺物実測図(6)	27

写真図版目次

巻頭図版 1	東大道遺跡A地区遠景南から
巻頭図版 2	東大道遺跡A地区遠景東から
写真図版 1	東大道遺跡A地区上空から
写真図版 2	東大道遺跡A地区 SD01・SD02
写真図版 3	東大道遺跡A地区 SX01・SX01完掘状況
写真図版 4	東大道遺跡A地区 擦石・擦皿出土状況・甕式土器出土状況・SD02石鏃出土状況
写真図版 5	東大道遺跡A地区 SX01土器出土状況・石鏃出土状況
写真図版 6	東大道遺跡A地区出土縄文土器
写真図版 7	東大道遺跡A地区 SD01出土遺物・SD02出土遺物
写真図版 8	東大道遺跡A地区 住居跡(SX01)出土遺物
写真図版 9	東大道遺跡A地区 住居跡(SX01)出土遺物
写真図版10	東大道遺跡A地区 出土石器(1)
写真図版11	東大道遺跡A地区 出土石器(2)
写真図版12	東大道遺跡A地区出土遺物(1)
写真図版13	東大道遺跡A地区出土遺物(2)
写真図版14	東大道遺跡A地区出土遺物(3)
写真図版15	東大道遺跡A地区出土遺物(4)
写真図版16	東大道遺跡A地区出土 須恵器・陶磁器

第1章 はじめに

1. 調査の経緯

(1) 調査に至る経過

大分市の中心であるJR大分駅周辺では、駅を挟んで南側と北側では大きく様相を異にする。すなわち、北側は、商業地域として大分市の顔の賑わいを見せているが、南側は、住宅地を中心とした、閑静な地域で、一部は迷路状の細い市道も見られる。そこで、この南北地域の格差を解消するとともに、両地域の通行をスムーズにするため、大分駅南側地域を中心に、駅の高架や区画整理事業が、大分県と大分市が一体となり、大分駅周辺総合整備事業として計画され、実施されている。

当遺跡の調査の起因となった県道庄の原佐野線の建設も、大分駅の南に西から東に延びる上野丘陵の裾に沿って計画されたもので、大分市内の交通緩和をはかるため、大分市西部の庄の原にある大分自動車道の大分インターと、大分市東部にある佐野地区を結ぶ、新設の道路として建設されるものである。

県道庄の原佐野線建設工事は、西側から大道工区・金池工区・上野工区に分けて土地収容が実施されている。これに伴う埋蔵文化財の調査は、この工程に従い、平成10年度は大道工区の一部試掘調査から開始した。しかし、この年度の試掘調査では、本調査に至るような遺跡は確認されなかった。ところが、翌平成11年度の試掘調査では、大道工区で縄文時代と弥生時代の遺物包含層、金池工区で中世の並行する2条の溝が確認され、本調査が必用となった。

本書はこのうち大道工区で確認された東大道A地区の調査報告書である。

(2) 調査の経過

調査対象となった地区は上野台地の北裾に沿った幅約20m、長さ約40mの約800㎡である。発掘調査は、東側より西側に向け



第1図 県道庄の原佐野線路線図と東大道遺跡A地区

遺構検出を行っていった。その結果、調査区の東側は後世の削平を受けており、遺物の包含層は確認できなかった。中央付近から西側にかけて地形がそのままに残っており、中央付近で弥生時代の包含層と溝2本を確認した。西側では住居跡と思われる遺構が検出された。

こうして確認できた遺構や遺物包含層に対する調査は、まず遺物包含層の掘り下げから行った。その結果、調査区中央付近から西側にかけてピット群が検出された。また中央付近で検出された溝2本は、出土遺物から弥生時代のものと思われるSD01、SD02と命名した。また調査区西側で検出された古墳時代の住居跡はSX01とした。

以上のような経過で調査区内の遺構や遺物包含層の調査を終了したが、全体の地形は南から北に傾斜しており、調査区北側では湧水があり、後世に埋め立てられていることが確認できた。そこで、調査はこの表土を除去した南側半分に留めることにした。

(3) 調査の体制

東大道遺跡A地区の調査は以下の体制で実施した。

調査主体 大分県教育委員会

調査総括 工藤 正徳 (大分県教育庁文化課長)

麻生 祐治 (大分県教育庁文化課参事兼課長補佐)

清水 宗昭 (大分県教育庁文化課参事兼課長補佐)

調査体制 坂本 嘉弘 (大分県教育庁文化課大型事業担当主幹)

槇島 隆二 (大分県教育庁文化課大型事業担当主査)

阿比留士朗 (大分県教育庁文化課大型事業担当嘱託)

2. 遺跡の立地と環境

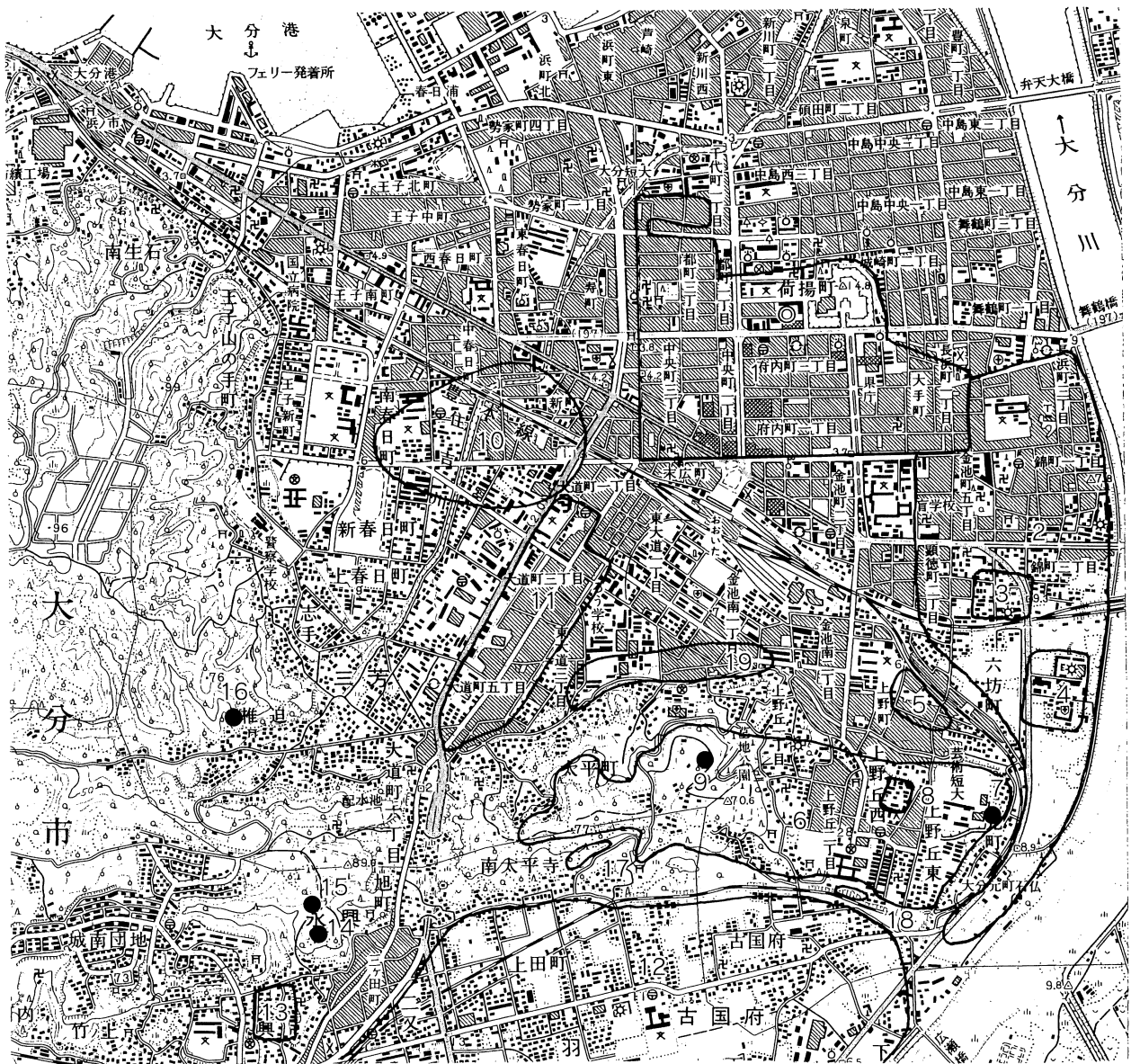
(1) 地理的環境

瀬戸内海の西端、別府湾の南側に広がる大分平野は、由布山の麓に源を発して東に流れ、別府湾に注ぐ大分川の沖積により形成される。しかし、標高約30m~40mの丘陵がこの平野を分断し、いくつもの小地域を作り出している。

東大道遺跡A地区もこうした小地域のひとつで東は大分川が流れ、北は別府湾が広がり西は高崎山から続く丘陵地帯となっており、南は西から東に延びる上野台地で遮断されている。そして、西側と南側の丘陵からは、毘沙門川をはじめとする小河川が流れ、低湿地を形成している。

現在は、市街化と埋め立て工事が進み、旧地形を見ることは出来ない。しかし、明治年間の5万分の1の地図を見ると、外堀で囲まれた府内城と、それから郊外に延びる街道筋以外に人家はなく、水田となっている。遺跡が存在していた頃の景観は、別府湾沿いに東西に砂丘があり、その後背部には低湿地が広がる。そして人々が居住可能であったのは、こうした地形の中の微高地や丘陵沿いの部分であったと想定できる。

東大道遺跡A地区はこうした立地の中で、上野台地の北側の裾に形成された遺跡といえる。



第2図 東大道遺跡と周辺の遺跡

1. 府内城・城下町
2. 中世大友府内城下町跡
3. 大友氏館跡
4. 万寿寺跡
5. 若宮八幡宮遺跡
6. 上野遺跡群
7. 大臣塚古墳
8. 上野大友館跡
9. 飯盛塚古墳
10. 東田室遺跡
11. 大道条里跡
12. 古国府遺跡群
13. 永興遺跡
14. 弘法穴古墳
15. 千人塚
16. 古宮古墳
17. 南太平寺横穴墓群
18. 岩屋寺横穴墓群
19. 東大道遺跡

(2) 歴史的環境

東大道遺跡A地区のある大分平野は、豊後国と呼ばれた古代から現在に至るまで、大分の政治経済の中心地である。このため、残されている遺跡も、この地域のみならず、大分の歴史を語る上で重要なものが多い。

旧石器時代の遺跡は、上野台地の西部に位置する庄の原遺跡で、九州横断道路建設に伴い調査を行い、ナイフ形石器や剥片尖頭器などが出土している。このうち、ナイフ形石器の一部には研磨痕のあるものも認められた。縄文時代の遺跡も庄の原遺跡で早期の押型文土器や晩期の無刻目突帯文土器が出土しているほか、大分川河床から縄文時代前期の轟式土器、中期の瀬戸内系土器である船元式土器、後期の磨消文土器・晩期の刻目突帯文土器が多量に出土しており、石棒や土偶も採集されている。

弥生時代の遺跡は上野台地上に中期から後期の集落遺跡がある。その一方、大分駅西側の毘沙門川沿いの微高地上にも弥生時代後期の遺跡である東田室遺跡などがある。この弥生時代後期の遺物は、大分川の河床からも採集されており、大分川の対岸の下郡遺跡群では前期から後期に駆けての遺跡が調査されている。

古墳時代の遺跡は、平野部で明確な集落は確認されていない。しかし、この地域と密接に関わるような立地を示す、重要な古墳が3基存在する。

まず、最古の古墳は、この地域の西側丘陵上にかつて存在した亀甲山古墳である。この古墳は、箱式石棺を主体部とするもので、前方後円墳の可能性が強いものである。石棺内からは、三角縁神獣鏡が出土しており、4世紀代のこの地域の首長墓と考えられる。

次に5世紀代の古墳として、上野台地の東端部に位置する大臣塚古墳があり、大分川と対岸の下郡地区の平野を望む。前方部は一部消滅しているが、全長は30m以上あり、主体部は箱形石棺である。周辺には周溝も確認され、そこからは円筒埴輪も出土している。

7世紀代には西側丘陵から流れる毘沙門川流域の南側斜面に築造された古宮古墳がある。この古墳は、方墳で、主体部は凝灰岩を削り貫いた石槨式石棺で、南に開口している。この古墳は、その形態や時期からその被葬者は、壬申の乱で活躍した「大分の君恵尺・稚臣」と想定され、現在、国指定史跡となり整備保存されている。

8・9世紀には上野台地の南側の平野に、国府や国分寺が築造されるものの、上野台地東端の、この地域を見下ろす場所に上野廃寺と呼ばれる礎石建物が建立され、百濟系単弁軒丸瓦が出土している。また、同時期の遺跡として、台地先端部には竜王畑遺跡があり、掘立柱の大型建物や溝が整然とした状態で検出され、国司級の居館跡と考えられている。

中世になると、大分川の西側の自然堤防上に「市」や「万寿寺」を中心とした町屋の形成が始まる。この町屋は、15・16世紀の豊後国の守護大名である大友氏支配の中心地として発展し、16世紀後半にはキリシタン大名となった大友宗麟による南蛮貿易によって国際色の高い都市として繁栄する。しかし、1587年の島津侵攻により荒廃し、大友の支配は薄れる。その後、宗麟の子義統は朝鮮出兵時の失態により知行を没収され、大友氏の支配は終わりを告げ、この中世の府内町は消滅する。

そして16世紀末には、豊後国は小藩分立の時代を迎え、17世紀初頭には現在の大分市は府内藩となり、府内城を中心とした城下町が整備された。その後、江戸時代を通じて府内藩の中心域として栄え、明治を迎える。

明治以降は、大分県の県庁所在地として発展していく

第2章 調査の成果

1. 調査の概要

(1) 遺構の配置

東大道遺跡A地区は大分市美術館のある上野台地と大分県立盲学校のある低地の間に位置し、上野台地のから北にのびる扇状地状地形の扇端部分にあたる。道路建設に伴う発掘調査のため、調査区は東西に細長く、その範囲は東西約100m、南北約30mである。確認調査の結果、調査範囲の南側は台地からの湧水が湧き出ており、東側は後世に削平を受けていることが分かっていた。このため、実際に発掘調査を実施したのは、確認調査で包含層が確認された旧地形が残る西側の部分となった。

調査の結果、時期不明の柱穴数十基、弥生時代の溝2条、古墳時代の住居跡が確認された。このほか明確な遺構は確認されなかったが、調査区全域で縄文～古墳時代の遺物包含層を調査した。

2. 縄文時代の調査

(1) 出土状況

遺物は調査区全域からまばらに出土しており、特に2-A区に縄文時代前期の遺物が多く出土した。しかし、後世の削平のため、遺物包含層は薄く、遺物の出土量は少ない。

(2) 出土遺物 (第4図)

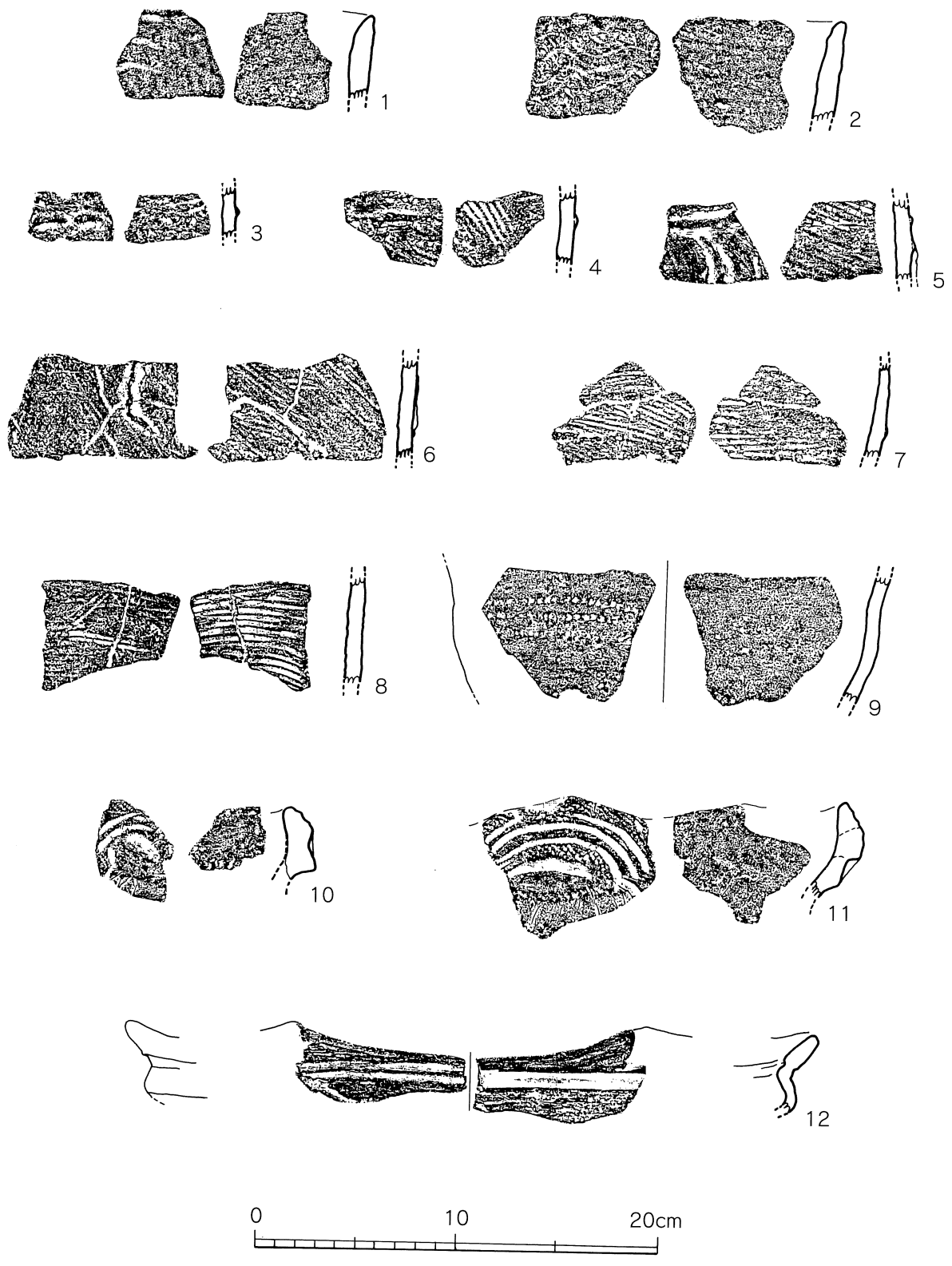
1～2は縄文時代前期の口縁部の資料で、1は内面には条痕、外面には沈線が施されている。色調は内面は黄褐色で、外面は茶褐色である。胎土に砂粒や角閃石・長石・灰色粒を多く含み、焼成は良好である。2は内面には条痕、外面には刺突文と一部縄文が施されている。色調は内面は黄褐色で、外面は暗茶褐色である。胎土に砂粒や角閃石・長石・灰色粒を多く含み、焼成は良好である。1・2とも胎土は縄文時代早期の押型文土器とよく似ており、縄文時代早期の資料の可能性もある。

3～7は隆帯を施す轟B式土器と思われる資料である。3は水平な隆帯を施し、内面はナデによる調整である。色調は淡黄灰色である。胎土に角閃石を多く含み、砂粒は少ない。焼成は良好である。4は水平な隆帯を巡らせ、その下部に条痕を施すもので、内面は条痕による調整である。色調は茶褐色で、胎土に砂粒や長石を多く含む。焼成は良好である。5は2条の水平な隆帯と1条の斜方向の隆帯を施している。内面は条痕による調整である。色調は黄灰色で、胎土に砂粒や角閃石・長石・灰色粒を多く含み、焼成は良好である。6も隆帯を施すもので、残存している隆帯は波状文を呈する可能性もある。内外面とも条痕による調整で、色調は淡黄灰色である。胎土に砂粒や角閃石・長石を多く含み、焼成は良好である。7は水平な隆帯がわずかに残り、内外面は条痕による調整である。色調は明茶褐色で胎土に砂粒や長石・灰色粒を多く含む。焼成は良好である。

8は外面に1条の沈線と縄文(一部擦り消し)を施し、内面は横方向の貝殻条痕を施す。色調は内面は暗茶褐色、外面は赤褐色である。胎土に細かい砂粒や角閃石を多く含み、焼成は良好である。9は瀬戸内系の深鉢の頸部の資料と思われる。条痕のち刺突文を3列施す。内面は条痕のちナデ調整である。色調は明茶褐色で胎土に角閃石や長石・灰色粒を多く含む。焼成は良好である。

10～11は縁帯文土器である。10は溝(SD02)から出土した口縁部片である。口縁部に3条の沈線と縄文を施し、内面はナデ調整である。色調は暗灰色で、胎土に砂粒や石英・灰色粒を多く含む。焼成は良好である。11は波状口縁になると思われ、3条の沈線を施したのちに縄文を施文し、内面はナデ調整である。色調は淡茶灰色で、胎土に砂粒や石英・白色粒・長石を多く含む。焼成は良好である。

12は波状口縁を持つ浅鉢の口縁部片で、内外面とも丁寧な横ナデ調整がされている。色調は暗黄茶色で、胎土に砂粒は少ない。焼成は良好である。



第3図 東大道遺跡A地区出土縄文土器実測図



第4図 東大道遺跡A地区 遺構配置図

第4図 東大道遺跡A地区 遺構配置図



3. 弥生時代の調査

(1) 溝状遺構(SD01)

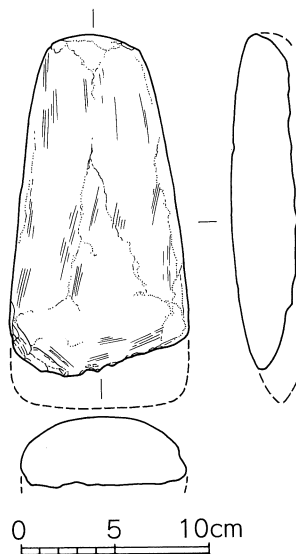
1) 遺 構 (第4図)

遺構は調査区の中央やや東寄りに位置し、南から北にY字状に延び、南側で消滅する。幅0.5～1.0m深さ約0.2mの浅い溝である。

2) 遺 物

石 器 (第5図)

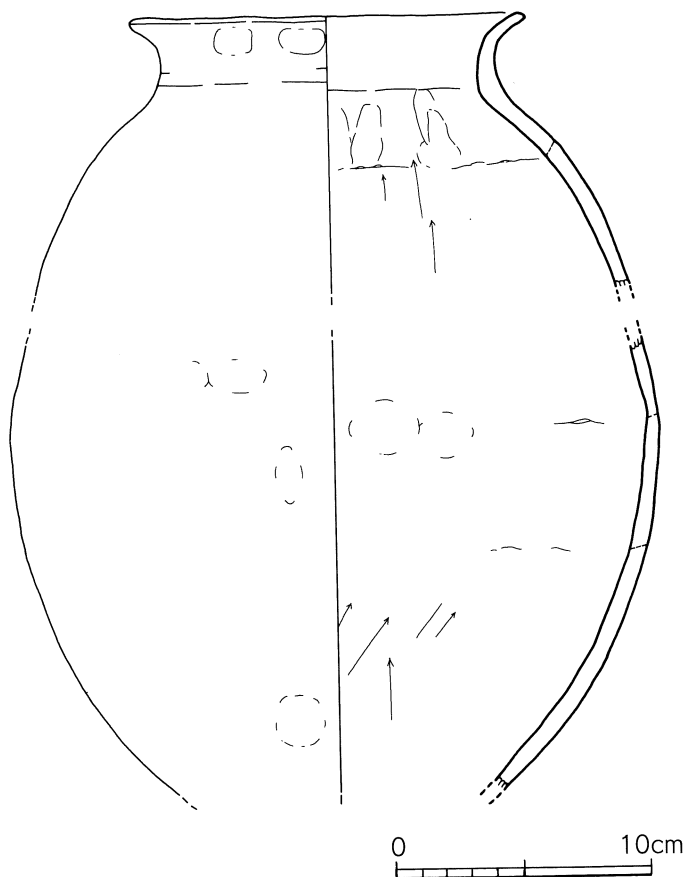
第5図はSD01出土の磨製石斧である。頁岩製で刃先は剥落しているが、小形の薄手の磨製石斧として復元できる。現在長9.00cm、幅4.70cm、厚さ1.75cmを測り、重さは99.90gである。



第5図 東大道遺跡A地区 SD01出土石器実測図

土 器 (第6図)

1は復元口径15.8cmを測り、胎土に角閃石や長石・砂粒を多く含む。外面の調整はナデ調整で、内面は指圧痕が残り、胴部にかけてはヘラ削りが見られる。色調は内外面ともに淡灰白色である。2は1に続く胴部で最大径25.8cmを測る。下端に一部赤変がみられる。

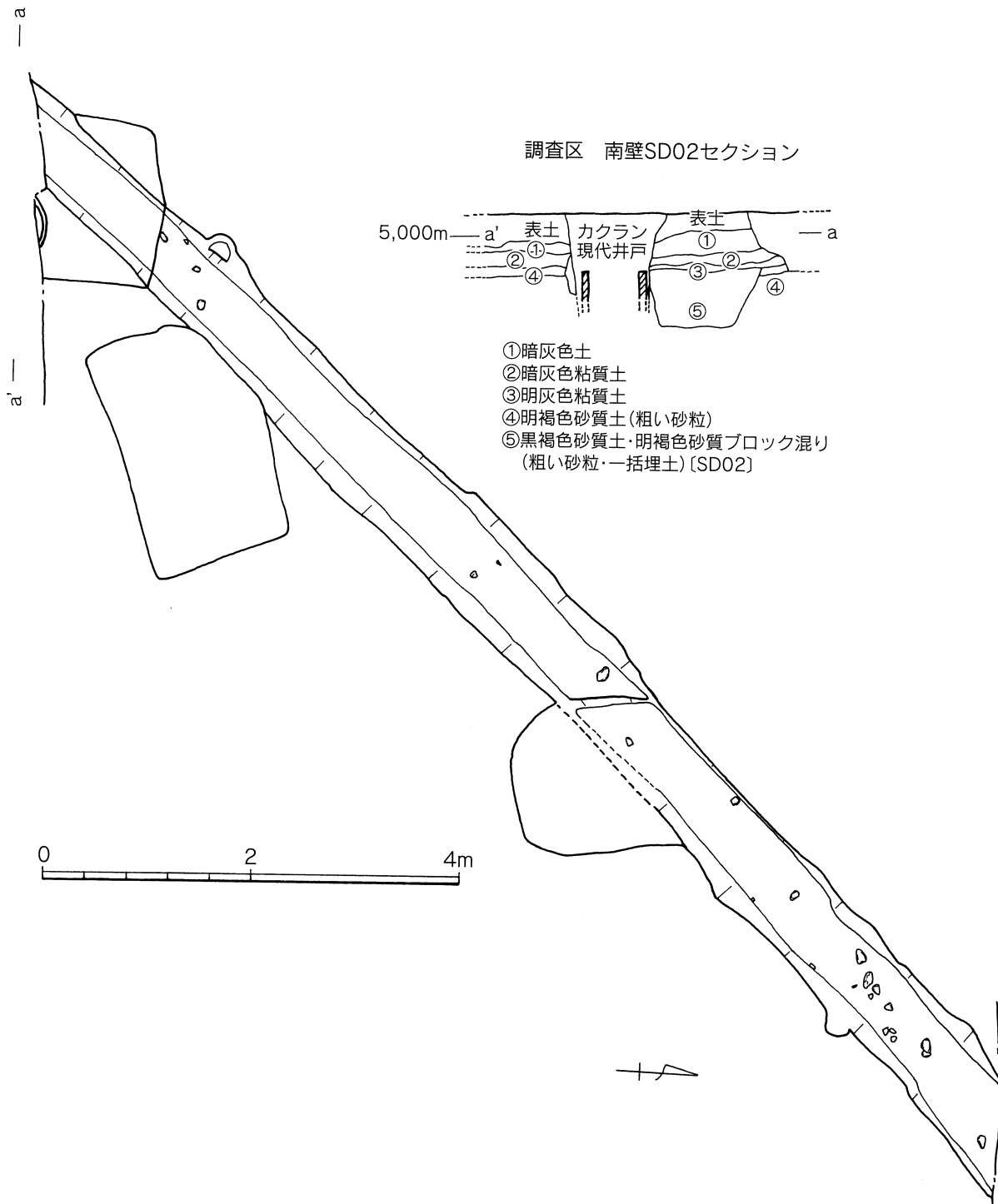


第6図 東大道遺跡A地区 SD01出土遺物実測図

(2)溝状遺構(SD02)

1) 遺 構 (第7図)

遺構は調査区の中央やや西よりに位置し、N-40°-Eである。調査区の南側は削平されていたが、検出された規模は、長さ13.2m、幅0.88m、深さ1.08mを測る。

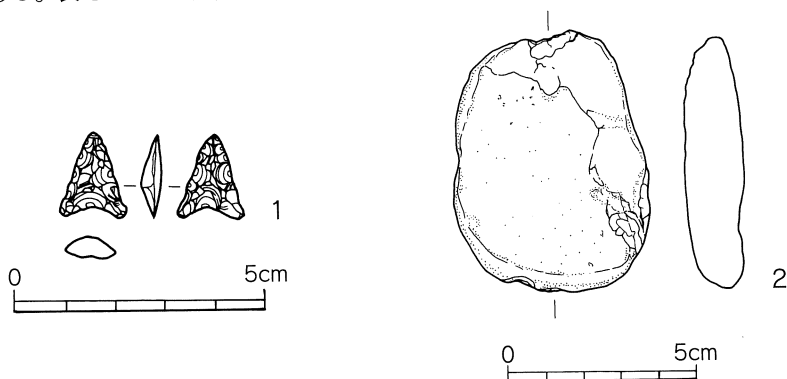


第7図 東大道遺跡A地区 SD02実測図

2) 遺物

石器 (第8図)

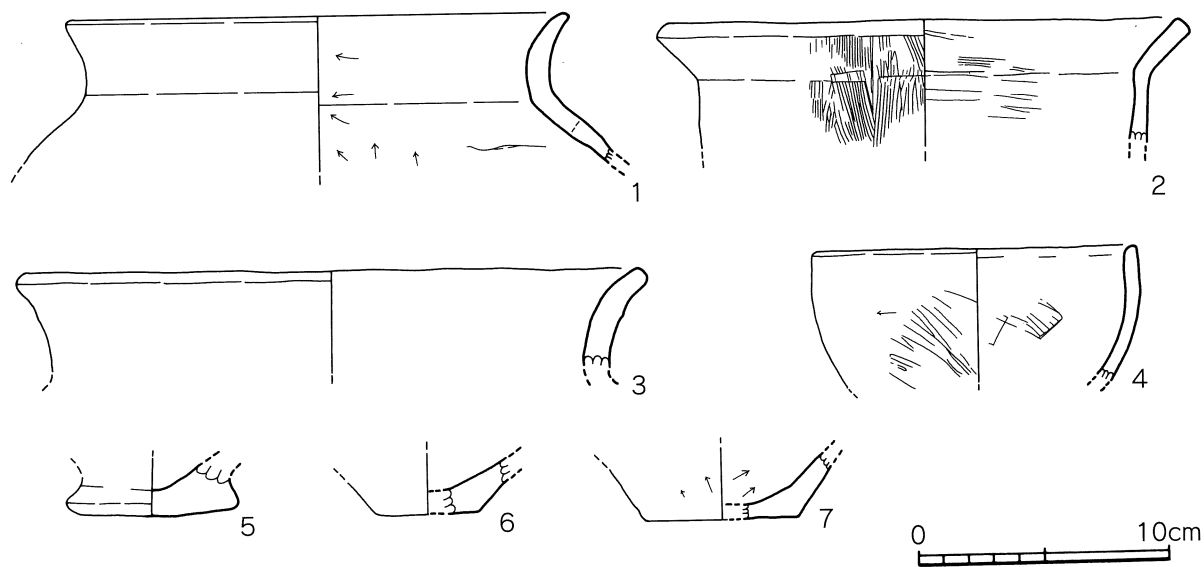
1は姫島産黒曜石製の石鏃である。長さ1.65cm、幅1.35cm、厚さ0.40cmを測り、重さは0.40gである。2は安山岩製の石錘である。長さ6.70cm、幅5.20cm、厚さ1.60cmを測り、重さは79.60gである。



第8図 東大道遺跡A地区 SD02出土石器実測図

土器 (第9図)

1～3は甕の口縁部片である。1は復元口径20.0cmで、胎土に角閃石・長石・砂粒を多く含む。外面はナデ調整、内面はヘラ削りの後ナデ調整が施される。色調は外面、暗灰色内面、淡灰褐色である。2は復元口径21.2cmで、胎土に角閃石・砂粒を多く含む。内外面ともにハケ目調整が施され、色調は内外面ともに茶褐色である。焼成は良好である。3は復元口径25.0cmで、胎土に角閃石・砂粒を多く含む。色調は外面、淡灰白色、内面、淡茶褐色で焼成は良好である。4は塊である。復元口径13.0cmで、胎土に角閃石と砂粒を多く含む。外面はヘラ削りを施した後にハケ目調整をした後にナデ調整を行っている。内面にはハケ目痕が残り、口縁部付近は丁寧なナデ調整が施されている。5～7は底部片である。5は壺の底部で底径6.8cmを測り、胎土に角閃石・砂粒を多く含む。内外面ともにナデ調整で色調は淡茶褐色である。焼成は良好である。6～7は甕の底部片である。6は底径4.0cmを測り胎土に角閃石・長石・砂粒を多く含む。調整はナデ調整で、色調は茶褐色である。焼成は良好である。7は底径6.0cmを測り、胎土に角閃石・長石を多く含む。内外面ともにヘラ削りの後ナデ調整で色調は外面、暗灰色、内面、淡灰色である。焼成は良好である。



第9図 東大道遺跡A地区 SD02出土遺物実測図

4. 古墳時代の調査

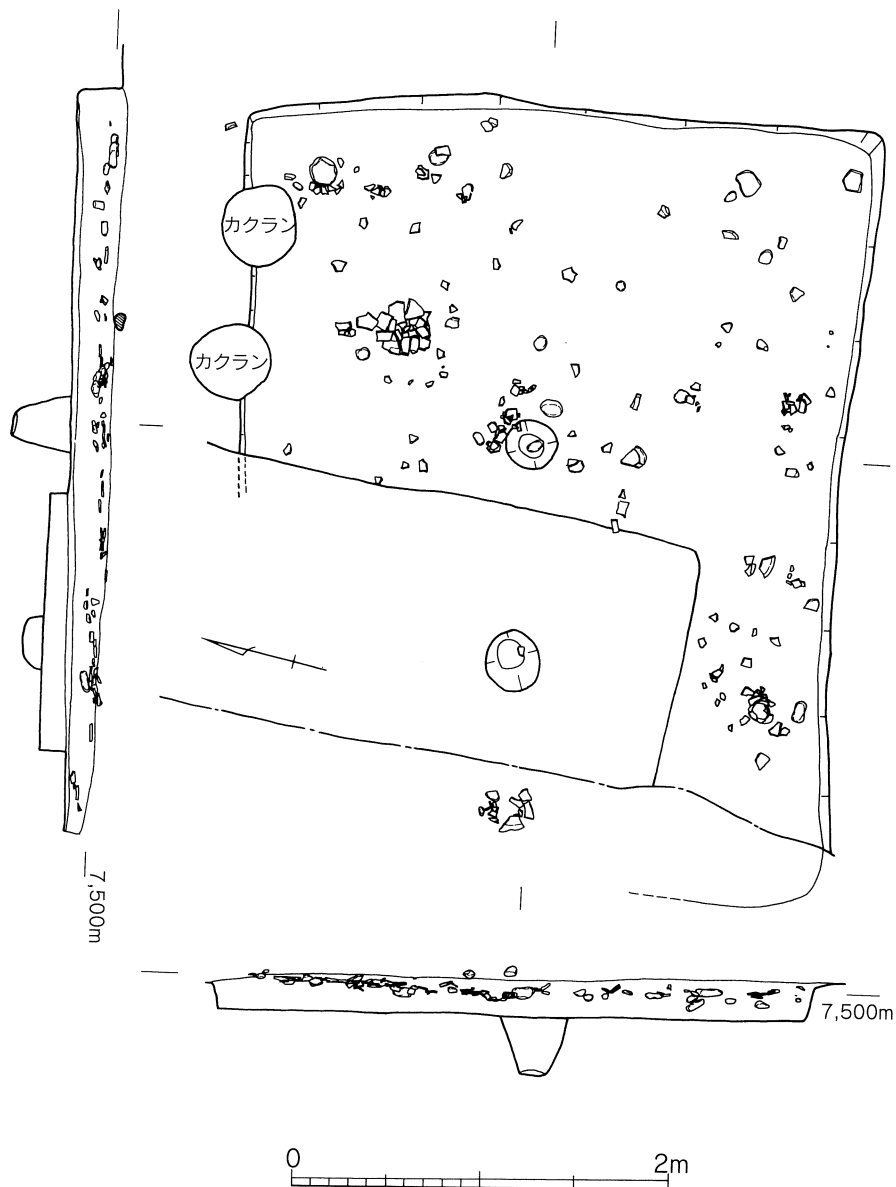
(1) 住居跡(SX01)

1) 遺構 (第10図)

遺構は調査区の西端に位置し、調査区の端に位置しているため、住居の全体ははっきりしない。平面プランは西端が調査区外にかかり、すべてが明らかではないが、東西に長い長方形を呈するものと推定する。規模は南北約3.4 m、東西約4.1+ α m、壁高0.2 mである。残存部分の西側は攪乱されていたが、支柱穴は2本確認できた。炉跡などは確認できなかった。遺物は住居全体で確認できたが、特に中央部から北側部分にまとまって確認できた。

2) 遺物 (第11～14図)

第11図1は二重口縁壺の口縁部片で、復元口径21.0 cmを測る。胎土に角閃石や長石を多く含む。内外面ともに横ナデ調整を施し、色調は茶褐色で焼成は良好である。頸部に黒班が残る。第11図2～5は甕である。2は口



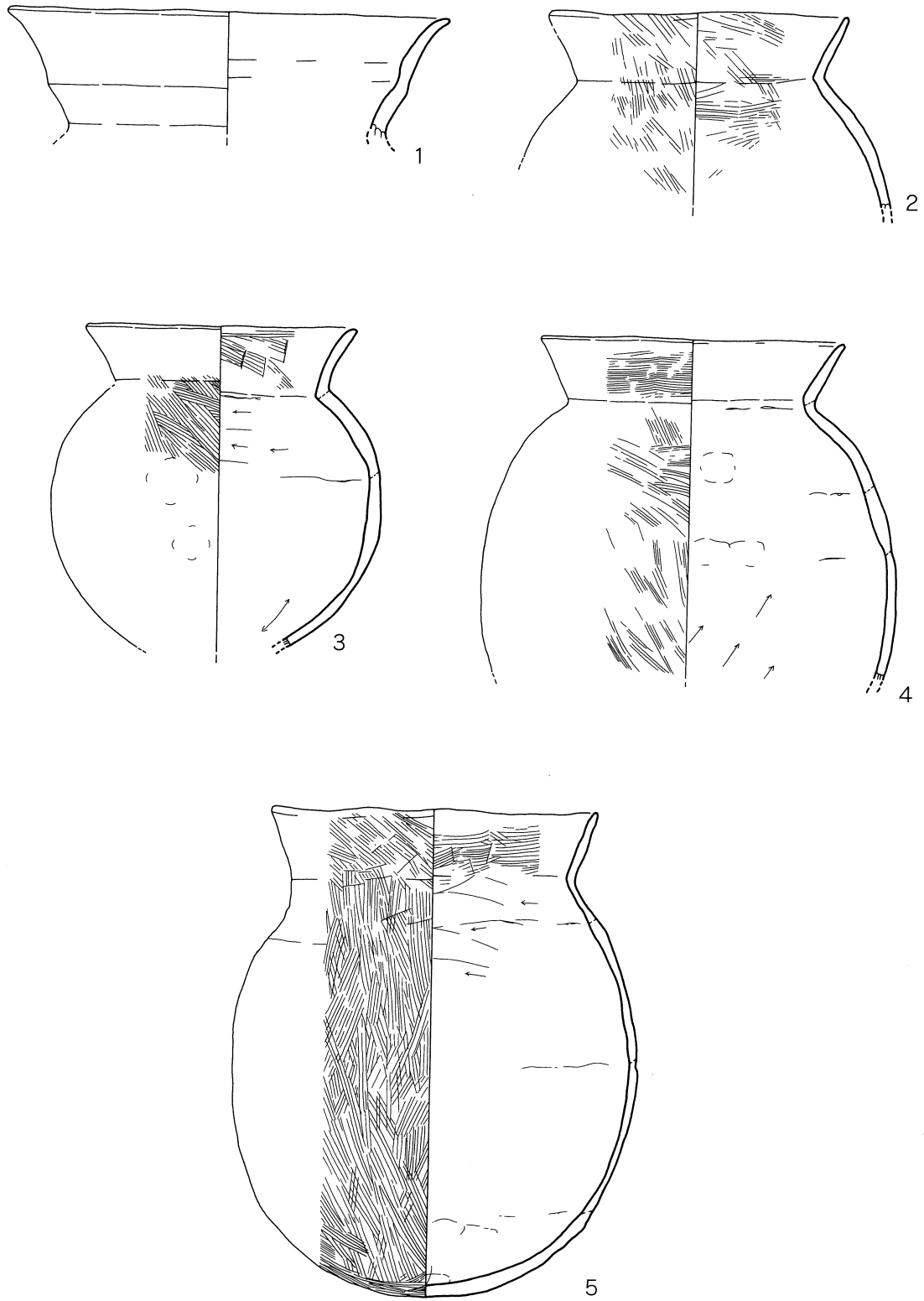
第10図 東大道遺跡A地区 住居跡(SX01) 実測図

径14.3 cmを測り、胎土に角閃石・砂粒・灰色粒を多く含む。内外面ともにハケ目調整で色調は淡茶褐色で焼成は良好である。3は復元口径12.8 cm、胴部最大径15.7 cmを測り、底部は丸底になると思われる。胎土に角閃石と長石・白色粒・砂粒を多く含む。外面は口縁部に横ナデを施し、肩部にハケ目を施し、胴部には指圧痕がみられる。内面は口縁部から頸部にかけてハケ目調整、胴部内面にはヘラ削りがみられる。色調は内外面ともに暗茶褐色で焼成は良好である。胴部外面に黒変がみられる。4は復元口径14.4 cmで胎土に角閃石と赤色粒・砂粒を多く含む。外面はハケ目調整、内面は横ナデ・ヘラ削りを施す。色調は内外面ともに赤褐色で焼成は良好である。5は口径15.4 cm。器高31 cm、胴部最大径19.3 cmを測り、底部は丸底になる。胎土に角閃石と長石・砂粒を多く含む。外面は口縁部に横ナデを施し、胴部はハケ目調整である。内面は口縁部から頸部にかけてハケ目調整、胴部はヘラ削りとナデ調整である。色調は茶褐色で焼成は良好で、胴部外面に黒変がみられる。

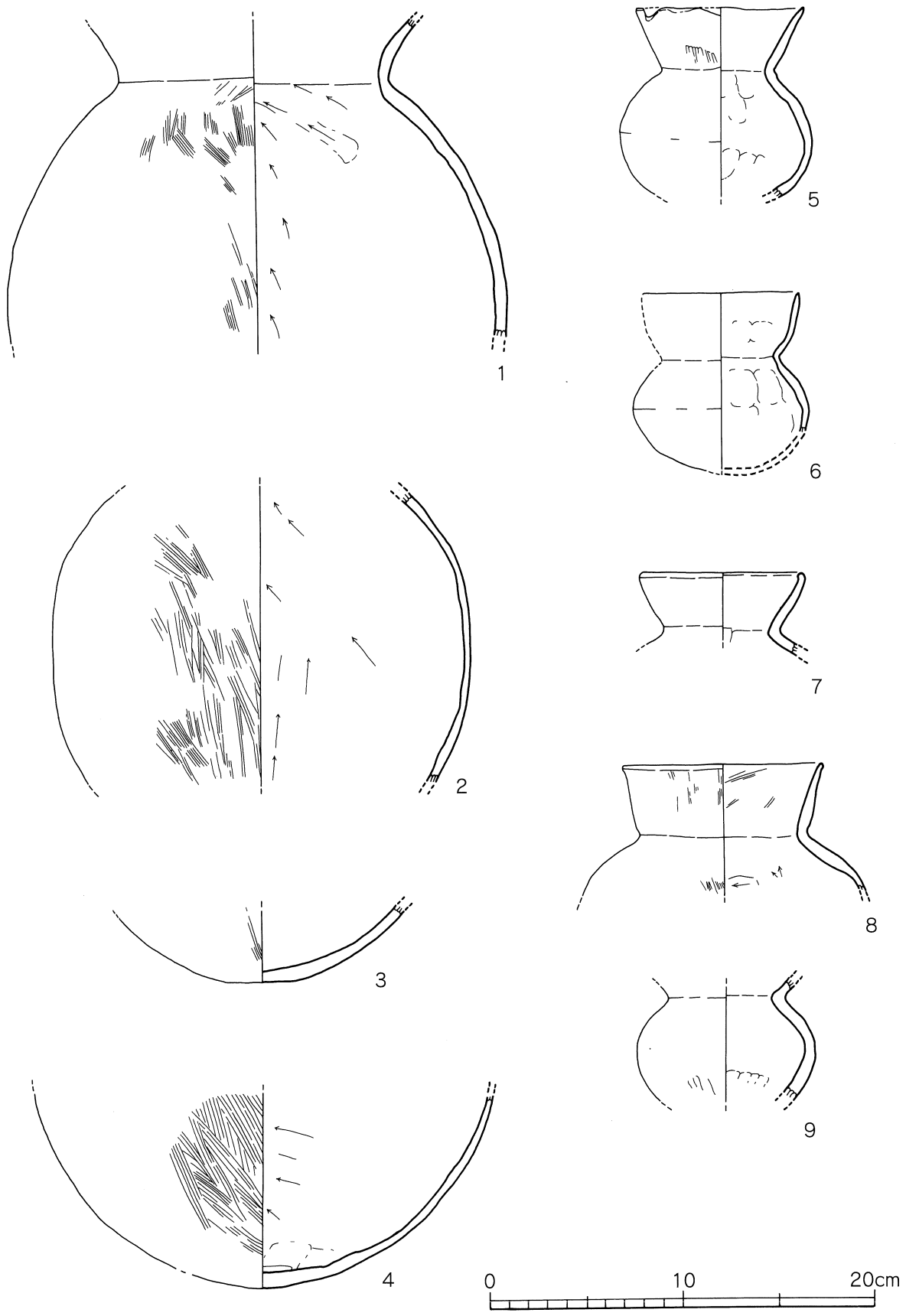
第12図1は甕の頸部である。頸部復元径14.0 cmで胎土に角閃石と砂粒を多く含む。外面は胴部にハケ目調整を施す。内面はヘラ削りの後ナデ調整がなされている。色調は内外面ともに暗茶褐色で焼成は良好で、胴部にススが付着する。第12図2は甕の胴部である。胴部最大径21.6 cmを測り、胎土に角閃石と赤色粒・長石・砂粒を多く含む。外面はハケ目調整で内面にはヘラ削りが施される。色調は内外面とも茶褐色である。第12図3～4は甕の底部である。3は胎土に角閃石・長石・赤色粒・砂粒を多く含む。外面は一部ハケ目調整がみられ、内面はナデ調整である。色調は外面、明茶褐色、内面、赤褐色である。焼成は良好である。4は胎土に角閃石・白色粒・砂粒を多く含む。外面はハケ目調整、内面はヘラ削りを施す。外面にはススが付着する。焼成は良好である。第12図5～9は小形丸底壺である。5は口径8.7 cmで胎土に角閃石・黒色粒・砂粒を多く含む。外面は口縁部にハケ目調整がみられ、内面はナデ調整である。色調は内外面ともに赤褐色で焼成は良好である。6は復元口径7.4～8.2 cm、胴部最大径9.2 cmを測る。胎土に角閃石・黒色粒・赤色粒・砂粒を多く含む。内外面ともにナデ調整であるが、内面に指圧痕が残る。色調は内外面ともに暗茶褐色で焼成は良好である。7は口径8.6 cmで胎土に角閃石・砂粒を多く含む。内外面ともにナデ調整である。色調は内外面ともに明茶褐色で焼成は良好である。8は復元口径10.4 cmで胎土に角閃石を多く含む。外面はハケ目調整の後ナデ調整、内面は口縁部はハケ目調整の後ナデ調整、胴部はヘラ削りと指圧痕がみられる。9は胴部復元径6.0 cmで角閃石を多く含む。外面は主にナデ調整だが、一部にハケ目痕がみられる。内面は工具によるナデ調整がみられる。色調は外面、茶褐色、内面、明茶褐色で焼成は良好である。

第13図1～5は高坏である。1は杯部で口径21.0 cmを測る。胎土に角閃石、赤色粒・砂粒を多く含む。内外面ともナデ調整で、色調は赤褐色である。焼成は良好である。2は頸部で受部径13.8～14.0 cmで胎土に角閃石・砂粒を多く含む。内外面ともにハケ目調整が施される。色調は内外面ともに明茶褐色で焼成は良好である。3～4は脚部である。3は胎土に角閃石を多く含む。外面はハケ目調整の後ヘラミガキ、内面はナデ調整で、しぼり痕がみられる。色調は内外面ともに淡茶褐色で焼成は良好である。4は胎土に角閃石を多く含む。内外面ともにナデ調整で色調は暗茶褐色である。焼成は良好である。5は脚の底部で底径11.6 cmを測る。胎土に角閃石・長石・白色粒を多く含む。内外面ともにナデ調整で色調は暗茶褐色である。焼成は良好である。6は小壺で復元口径12.0 cmである。胎土に角閃石・黒色粒・砂粒を多く含む。外面はハケ目及びナデ調整でススが付着し、内面はハケ目痕がみられる。色調は外面、淡茶色、内面、淡茶白色で焼成は良好である。7は広口小形丸底壺もしくは小形丸底罎である。復元口径10.8 cmで胎土に角閃石・黒色粒・赤色粒・砂粒を多く含む。外面はナデ調整で底部付近に指圧痕が残る。内面はヘラ削りが施され指圧痕が残る。色調は内外面ともに暗茶褐色で焼成は良好である。

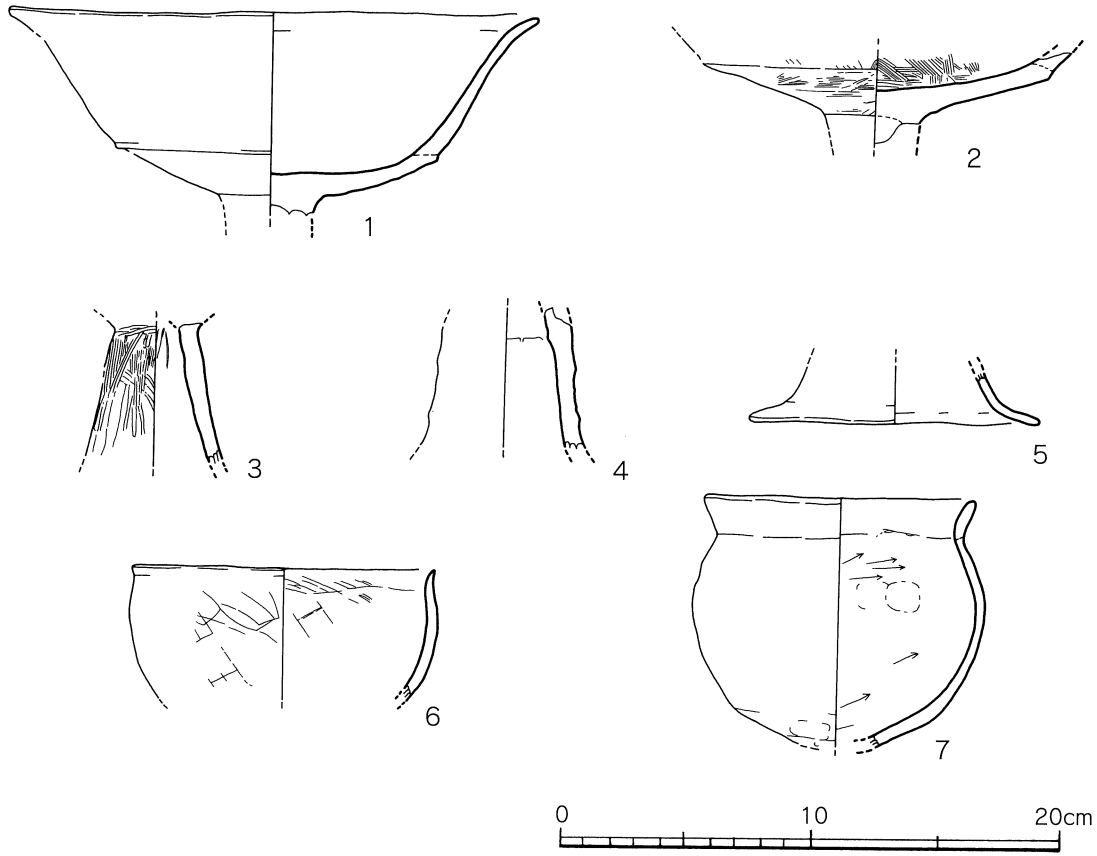
第14図は砥石で頁岩製である。長さ8.9 cm、幅3.0～5.0 cm、厚さ1.75 cm、重さ109.1 gである。砥面は三面確認できるが、もう一面は剥落しており砥面として使用されていたか否かは判断できない。



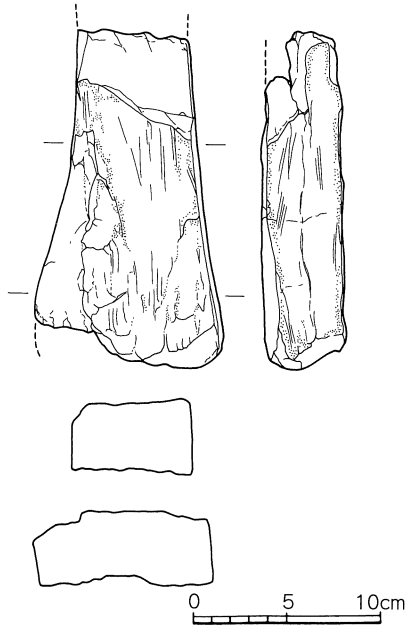
第11図 東大道遺跡A地区 住居跡(SX01)出土遺物 実測図1



第12图 東大道遺跡A地区 住居跡(SX01)出土遺物 実測図2



第13図 東大道遺跡A地区 住居跡(SX01)出土遺物 実測図3



第14図 東大道遺跡A地区 住居跡(SX01)出土石製品 実測図

5. 包含層出土遺物

1) 石器 (第15・16図)

第15図1は姫島産黒曜石製の石鏃である。長さ1.70cm、幅1.35cm、厚さ0.40cmを測り、重さは0.50gである。2～3はサヌカイト製の石鏃である。2は長さ1.55cm、幅1.4cm、厚0.20cmを測り、重さは0.50gである。3は長さ1.65cm、幅1.60cm、厚さ0.45cmを測り、重さは0.60gである。

4～5は姫島産黒曜石の石核である。4は長4.70cm、幅2.30cm、厚さ1.30cmを測り、重さは13.40gである。5は長さ3.25cm、幅5.10cm、厚さ2.40cmを測り、重さは38.90gである。

6～9は姫島産黒曜石の剥片である。6は長さ4.80cm、幅3.30cm、厚さ0.80cmを測り、重さは11.30gである。7は長さ6.80cm、幅3.90cm、厚さ1.60cmを測り、重さは31.80gである。8は長さ5.90cm、幅5.50cm、厚さ2.30cmを測り、重さは52.20gである。9は長さ5.00cm、幅6.35cm、厚さ1.35cmを測り、重さは40.20gである。

第16図1は磨石もしくは敲石である。安山岩製で、長さ12.60cm、幅12.00cm、厚5.00cmを測り、重さは1135.30gである。稜部に敲打痕、片面に磨面をもつ。2は石皿である。結晶片岩製で、一部欠落しているが現在長32.30cm、幅26.50cm、厚さ4.00～4.90cmで重さ6.50kgである。両面に使用痕がみられる。1と2の出土地点は非常に近接しており、この二つの遺物はセット関係にあると思われる。

2) 弥生時代の土器 (第17・18・19図)

第17図1～5は刻目突帯をもつ下城式土器である。1は口縁部下位に突帯が巡り、刻み目が加えられている甕形土器である。内外面横方向のナデ調整で色調は淡黄白色である。胎土に砂粒を多く含み焼成は良好である。2～3は口縁部下位に2条の刻目突帯が巡る甕形土器である。2は内外面横方向のナデ調整で、色調は暗茶褐色である。胎土に角閃石・長石を多く含み、砂粒は少ない。焼成は良好である。3は内外面横方向のナデ調整で、色調は淡茶褐色である。胎土に角閃石・石英・砂粒を多く含み、焼成は良好である。4は口縁部下位に一条の刻目突帯が巡る甕形土器である。復元口径25.0cmで内外面ともに横方向のナデ調整である。色調は外面、淡灰色、内面、淡茶褐色で胎土に長石・砂粒を多く含み、焼成は良好である。5は口縁部下位に二条の刻目突帯が巡る甕形土器である。復元口径28.0cmで外面ナデ調整で内面はハケ目痕が残るが基本的にはナデ調整である。色調は明茶褐色で胎土に角閃石・砂粒を多く含み、焼成は良好である。

6～7は壺形土器の口縁部片である。6は復元口径19.5cmで、口縁端部上面に勾玉状浮文がみられる。胎土は石英・砂粒を多く含む。内外面ともにナデ調整で、色調は淡茶褐色である。焼成はやや良好である。7は口縁端部外面に半截竹管によるC字状の刺突文を施し口縁端部上面には浮文がみられる。胎土に角閃石・砂粒を多く含む、内外面ともにナデ調整である。色調は茶褐色で、焼成は良好である。8は高坏の口縁部片である。内径の復元口径は17.2cmで、胎土に赤色酸化粒と微細な砂粒を多く含む、内外面ともにナデ調整である。色調は淡黄白色で焼成は良好である。

第18図1は甕形土器である。復元口径31.5cmを測り、口縁端部に二条の貼り付け突帯を有し、口縁部から胴部にかけてススが付着している。胎土に長石・赤色粒を多く含む、内外面ともにナデ調整である。色調は茶褐色で焼成は良好である。2は甕もしくは鉢形土器と思われる。頸部復元径15.2cmで胎土に0.1～1.3mmの角閃石と砂粒を多く含む。内外面ともにナデ調整で色調は淡茶灰色である。焼成は良好である。3は鉢形土器で、外面にススが付着する。復元口径23.6cmで、胎土に0.1～1.0mmの角閃石と砂粒を多く含む。内外面ともにナデ調整で色調は外面、淡灰色、内面、淡灰白色である。焼成は良好である。4は小形壺である。復元口径14.0cmで、胎土に0.1～1.0mmの角閃石を多く含む、砂粒や灰色粒も多く含む。外面の一部にススの付着がみられる。内外面ともにナデ調整で、色調は外面、茶褐色、内面、暗灰色である。焼成は良好である。5～9は甕形土器の底部片である。5は復元底径5.6cmで、胎土に0.1～1.0mmの角閃石と砂粒を多く含む。調整は基本的にナデ調

整だが、外面はヘラ削りの後にナデ調整が行われている。色調は暗茶褐色で、焼成は良好である。6は復元底径15.0 cmで、底部外面に刻み目が施されている。胎土に0.1～1.0 mmの角閃石・0.1～3.5 mmの灰色粒と砂粒を多く含む。内外面ともにナデ調整で色調は外面、茶褐色、内面、灰色である。焼成は良好である。7は底径5.5～6.1 cmを測り、胎土に0.5～4.0 mmの石英・0.1～2.5 mmの角閃石・0.1～2.0 mmの長石を多く含み、砂粒も多い。内外面ともにナデ調整であり、外面には工具による押さえ痕が残る。8は底径6.2 cmを測り、胎土に0.1～0.2 mmの角閃石・0.1 mm大の長石を含み、砂粒も多い。2.0 mmの石英もみられる。外面はハケ目調整の後ナデ調整され、指圧痕が残る。内面はナデ調整で指圧痕が残り、一部黒変がみられる。色調は外面、淡灰白色、内面、淡灰色で焼成は良好である。9は復元底径5.2 cmで、胎土に0.1～0.5 mmの角閃石と砂粒を多く含む。外面はヘラ削り、内面はナデ調整である。色調は暗茶褐色で焼成は良好である。10は壺形土器の底部である。復元底径8.0 cmで、1.0 mmの角閃石を含み、灰色粒・砂粒を多く含む。内外面ともにナデ調整であるが、外面下部にハケ目痕が残る。色調は外面、赤褐色で全体が赤変している。内面は淡灰色である。焼成は良好である。

第19図1は複合口縁壺の口縁部片である。復元口径26.6 cmを測り、口縁外部に不連続のヘラ描き文様を、上部には勾玉状浮文を施す。2は1に続く頸部片で、断面三角形を呈する貼り付け突帯を8条巡らし、その下部に勾玉状浮文を飾る。復元頸部径は11.6 cmを測る。3は2に続く胴部片で、断面三角形を呈する貼り付け突帯を胴部最大部に施す。胴部最大径は33.6 cmである。1・2・3とも胎土に石英・長石・砂粒を多く含む。内外面ともに調整は基本的にナデ調整であるが、外部は一部にハケ目が残る。色調は淡茶褐色で、焼成は良好である。

3) 古墳時代の土器 (第20・21図)

第20図1は土師器の壺の口縁部片である。1は復元口径14.0 cmを測り、胎土に角閃石を多く含む。内外面ともにナデ調整で色調は淡灰色である。焼成は良好である。2～4は土師器の甕の口縁部片である。2は復元口径14.9 cmを測り、胎土に角閃石と微砂粒を多く含む。内外面ともにナデ調整で色調は明黄褐色である。内面は一部、黒変がみられる。焼成は良好である。3は復元口径20.0 cmを測り、角閃石・長石・砂粒を多く含む。外面はナデ調整で内面はヘラ削りの後ナデ調整が行われている。色調は外面、暗灰色、内面、淡灰褐色で、焼成は良好である。4は復元口径25.0 cmを測り、胎土に角閃石と砂粒を多く含む。内外面ともにナデ調整である。色調は外面、淡灰白色、内面、淡茶褐色で、焼成は良好である。5～6は高坏の口縁部片である。5は復元口径12.0 cmを測り、胎土に角閃石を多く含み、砂粒は少ない。内外面ともにナデ調整で、色調は赤褐色である。焼成は良好である。6は復元口径24.0 cmを測り、胎土に角閃石を多く含み、砂粒は少ない。外面はヘラミガキ及びナデ調整で、内面はナデ調整である。色調は外面、明黄褐色、内面淡黄褐色である。焼成は良好である。7～8は高坏の脚部片である。7は胎土に砂粒を多く含み、内外面ともにナデ調整である。色調は淡茶褐色で焼成は良好である。8は胎土に角閃石と砂粒を多く含み、外面はヘラミガキ、内面はナデ調整で、しぼり痕がある。色調は内外面ともに淡茶褐色である。焼成は良好である。

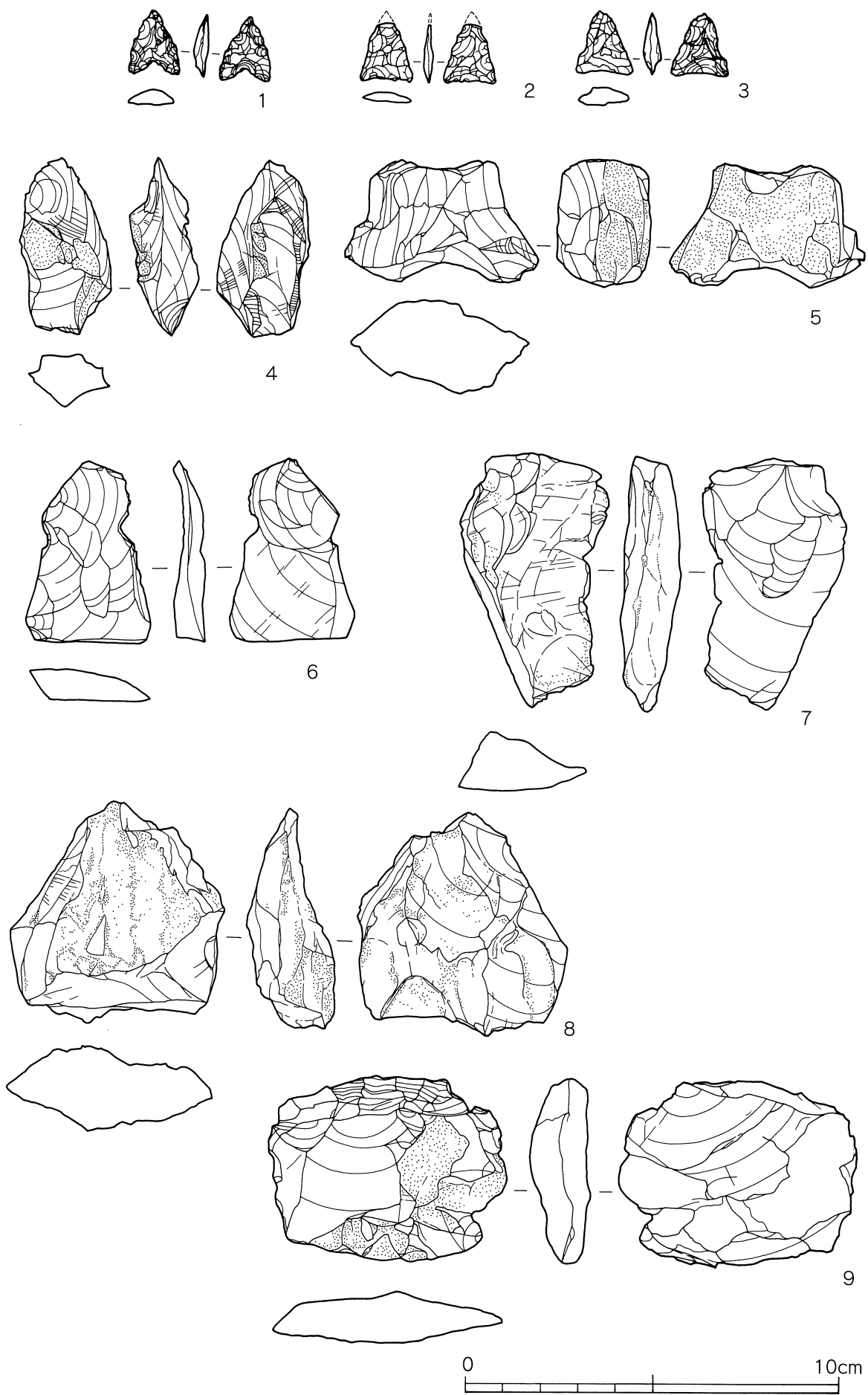
第21図は須恵器の坏身片である。1は砂粒をわずかに含み、調整は内外面ともに回転横ナデで外面の色調は暗緑灰色、内面は青灰色である。焼成は堅緻である。2は微量の砂粒を含み、調整は内外面ともに回転横ナデで、色調は青灰色である。焼成は堅緻である。3は復元外口径16.0 cmを測り、胎土に白色粒を多く含む。内外面ともに横ナデ調整で、色調は青灰色である。焼成は堅緻である。4は復元外口径13.0 cmを測り、胎土に黒色粒と砂粒をわずかに含む。内外面ともに回転横ナデで、色調は青灰色である。焼成は堅緻である。5は復元外口径13.0 cmを測り、胎土に黒色粒をわずかに含む。調整は内外面ともに回転横ナデで色調は青灰色である。焼成は堅緻である。6は復元外口径16.0 cmを測り、胎土に砂粒をわずかに含む。内外面ともに回転横ナデで、色調は青灰色、焼成は堅緻である。7は復元外口径12.5 cmを測り、胎土に石英と砂粒をわずかに含む。調整は外面はヘラ削りで内面は回転横ナデである。色調は内外面ともに青灰色で、焼成は堅緻である。8は復元外口径12.4 cmを測り、胎土に微砂粒をわずかに含む。調整は回転横ナデであるが外面底部はヘラ削りである。色調は青灰色で焼成は堅緻である。9は復元底径4 cmを測り、胎土に黒色粒と砂粒をわずかに含む。調整は外面はヘラ削りで内面は回転

横ナデである。色調は青灰色で、焼成は堅緻である。

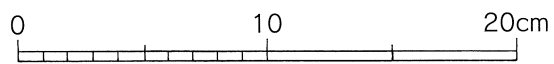
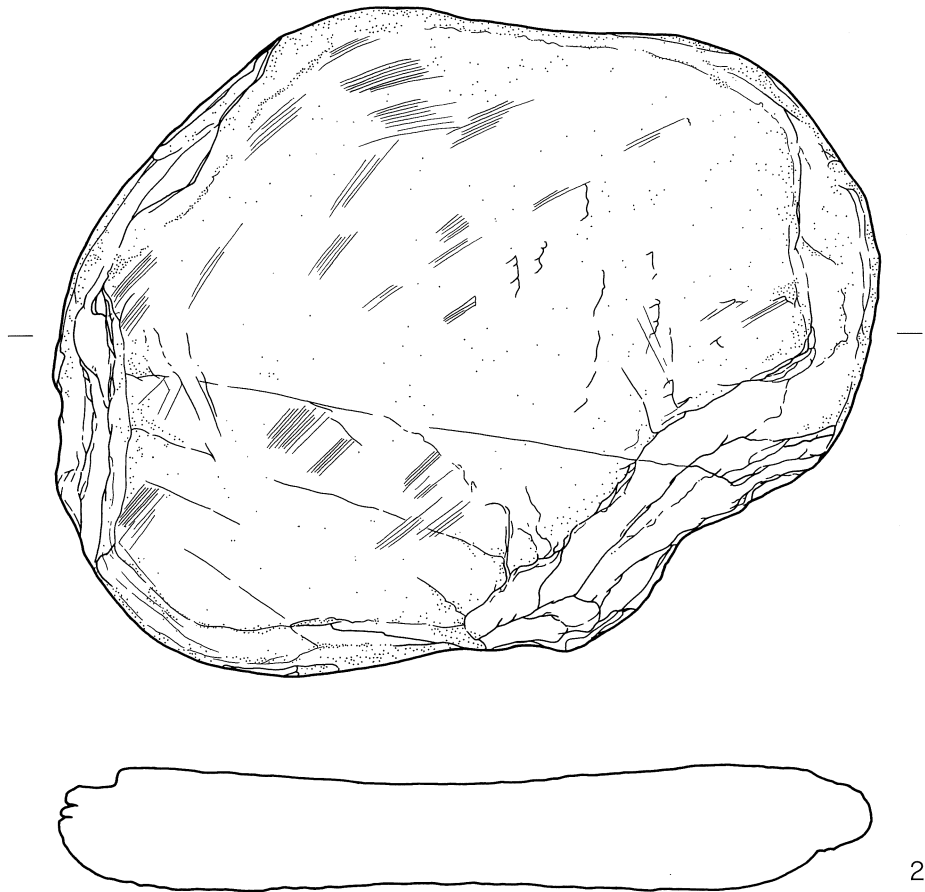
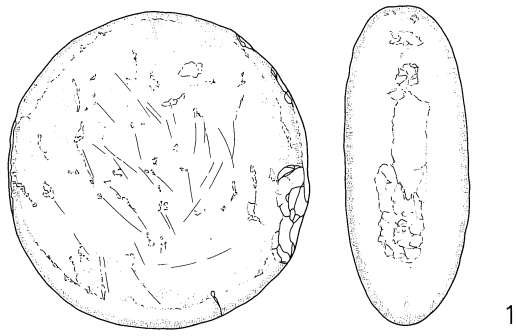
4) 近現代の陶磁器 (第22図)

第22図は陶磁器類である。1は白磁の小杯で底径1.7cmを測り、胎土は白色である。

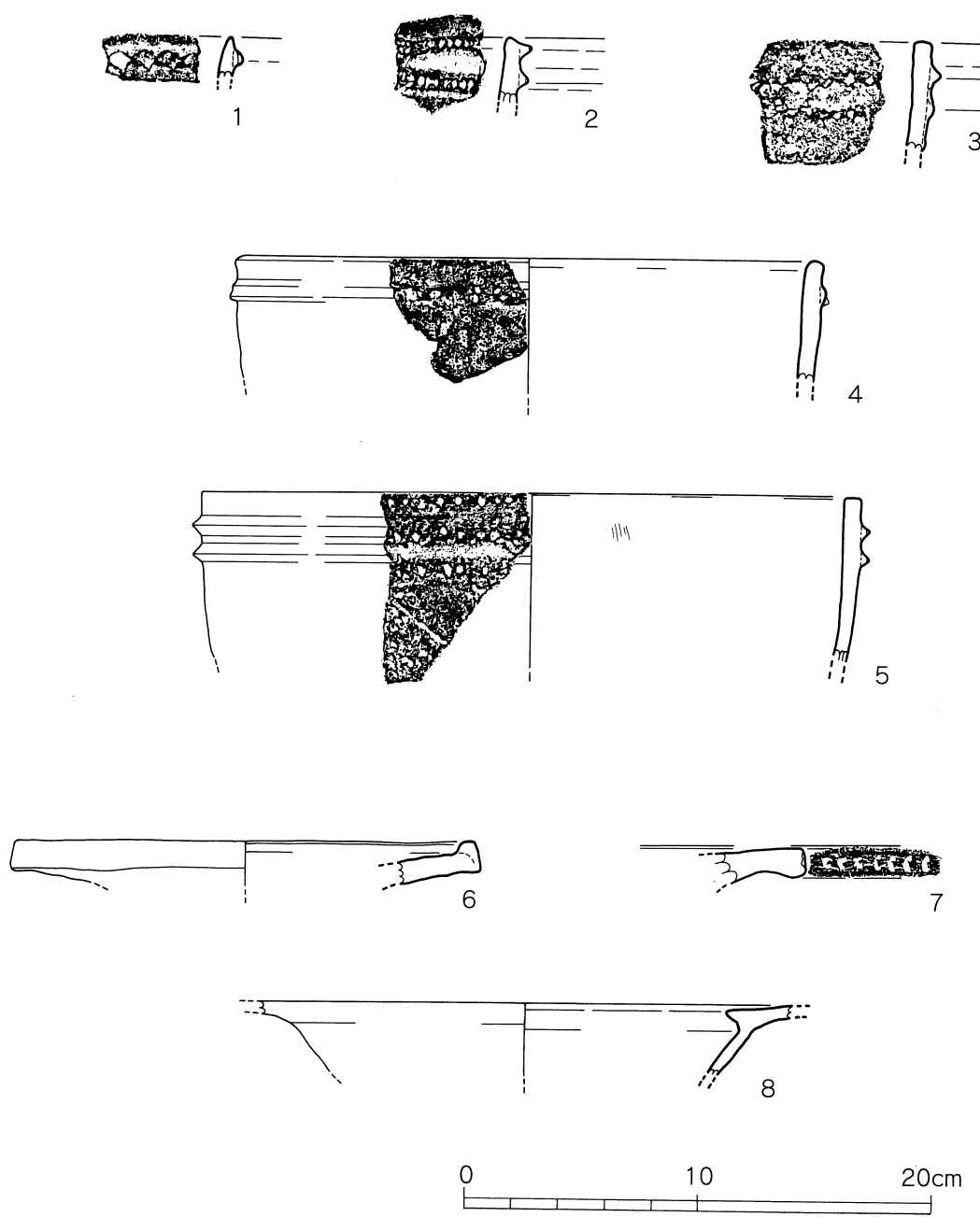
内外面に透明釉がかかる。見込み部分に「一勝」、高台内部に「河藤」の銘がみられる。2は白磁の小杯で底径1.9cmを測り、胎土は白色である。内外面に透明釉がかかる。見込み部分に「萬亀」?の銘がみられる。3は白磁の水兵を模した型作りの人形である。首の部分は欠損しているが、縦5.2cm、横2.1cm、幅1.3cmを測る。脚部の背面に丸字に昌の刻印がみられる。



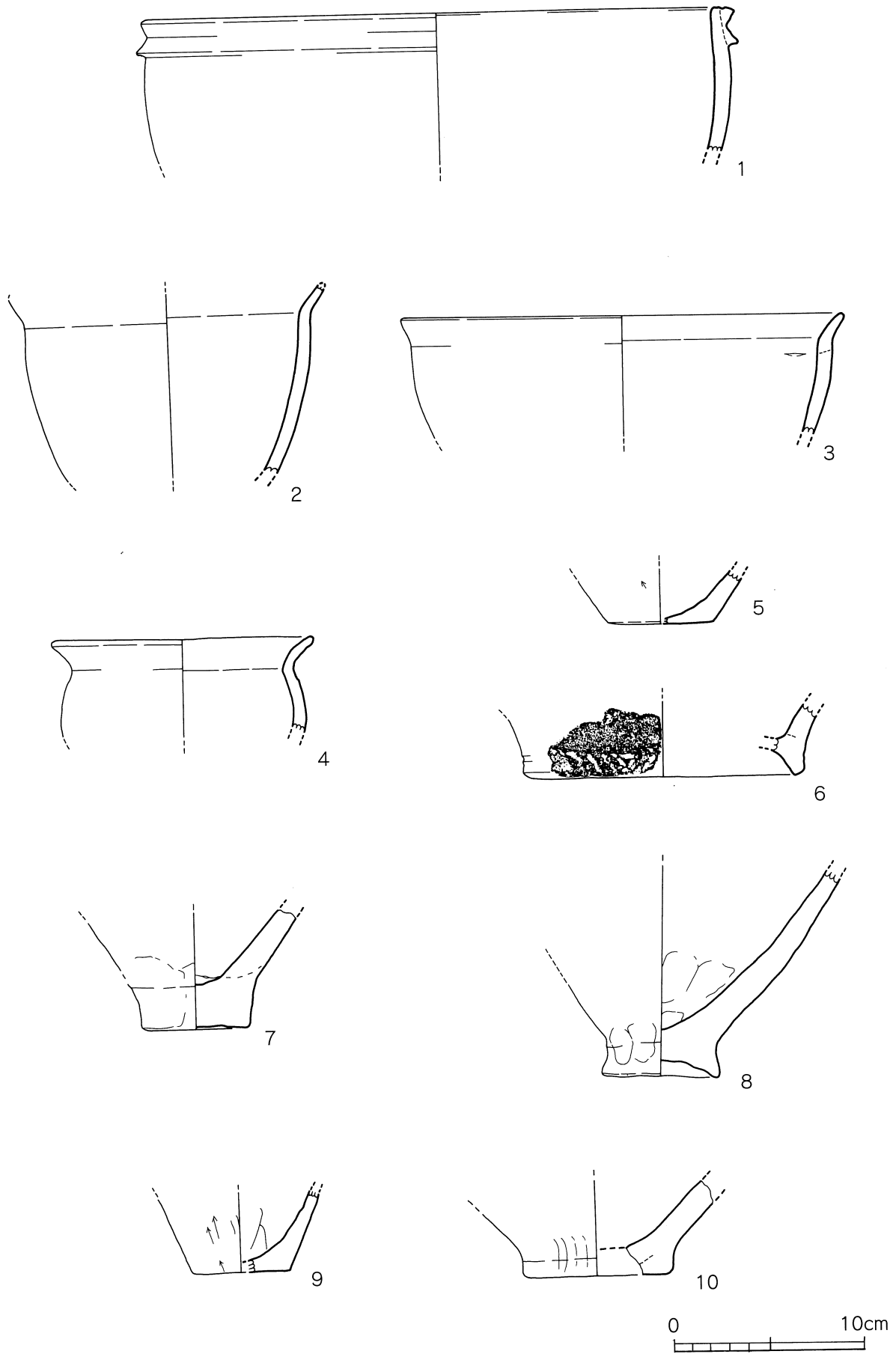
第15图 東大道遺跡A地区 出土石器 実測図(1)



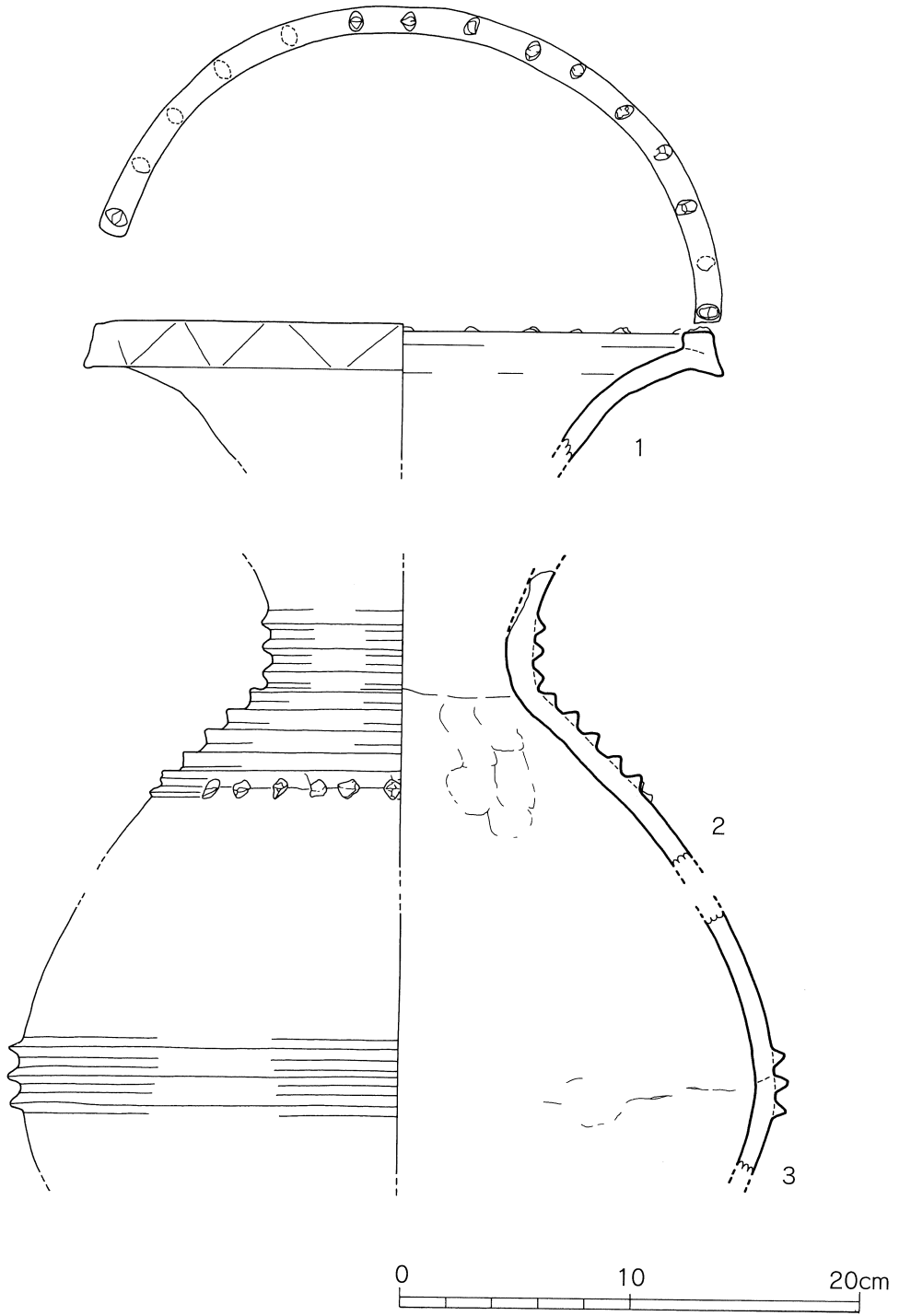
第16図 東大道遺跡A地区 出土石器 実測図(2)



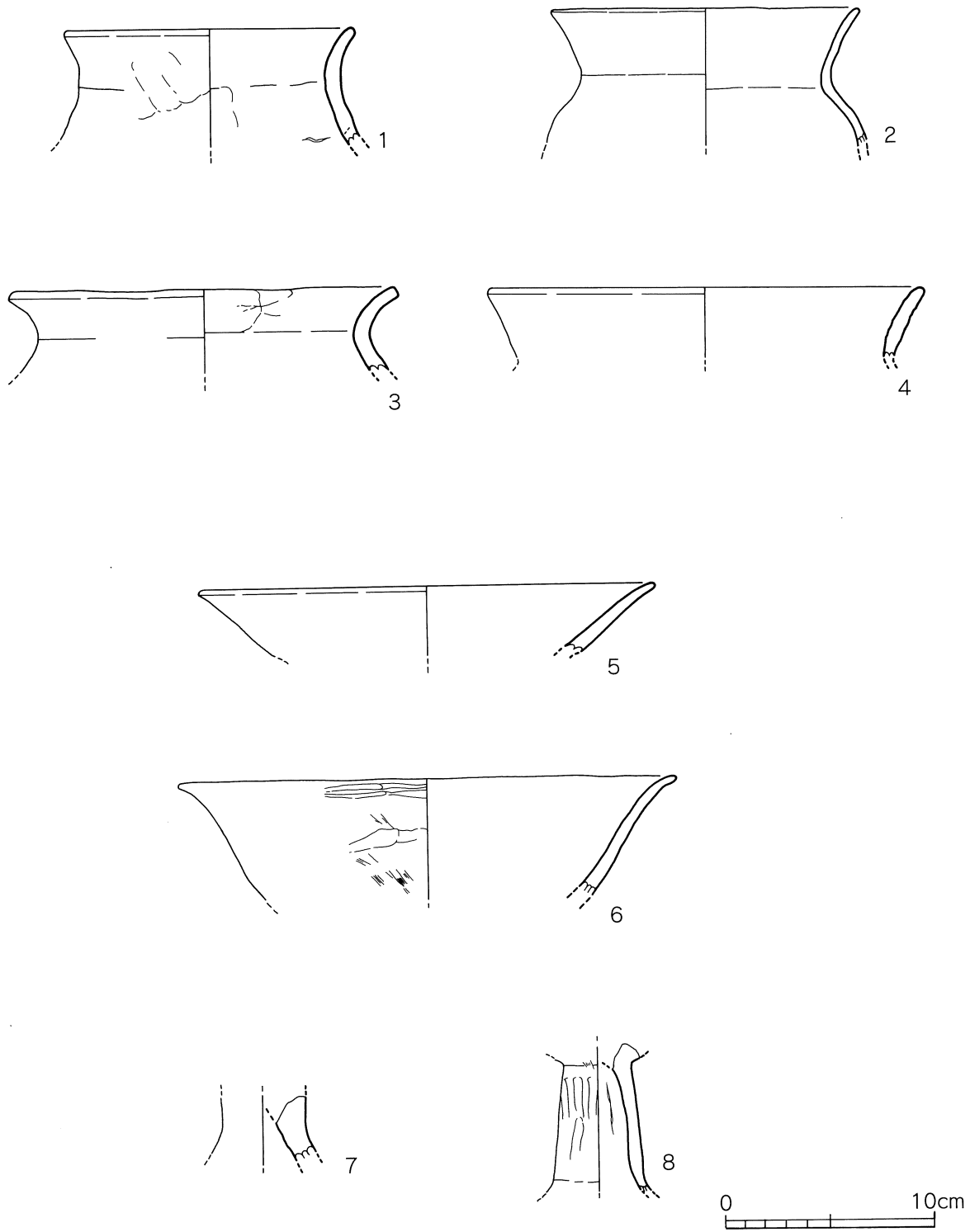
第17図 東大道遺跡A地区 出土遺物 実測図(1)



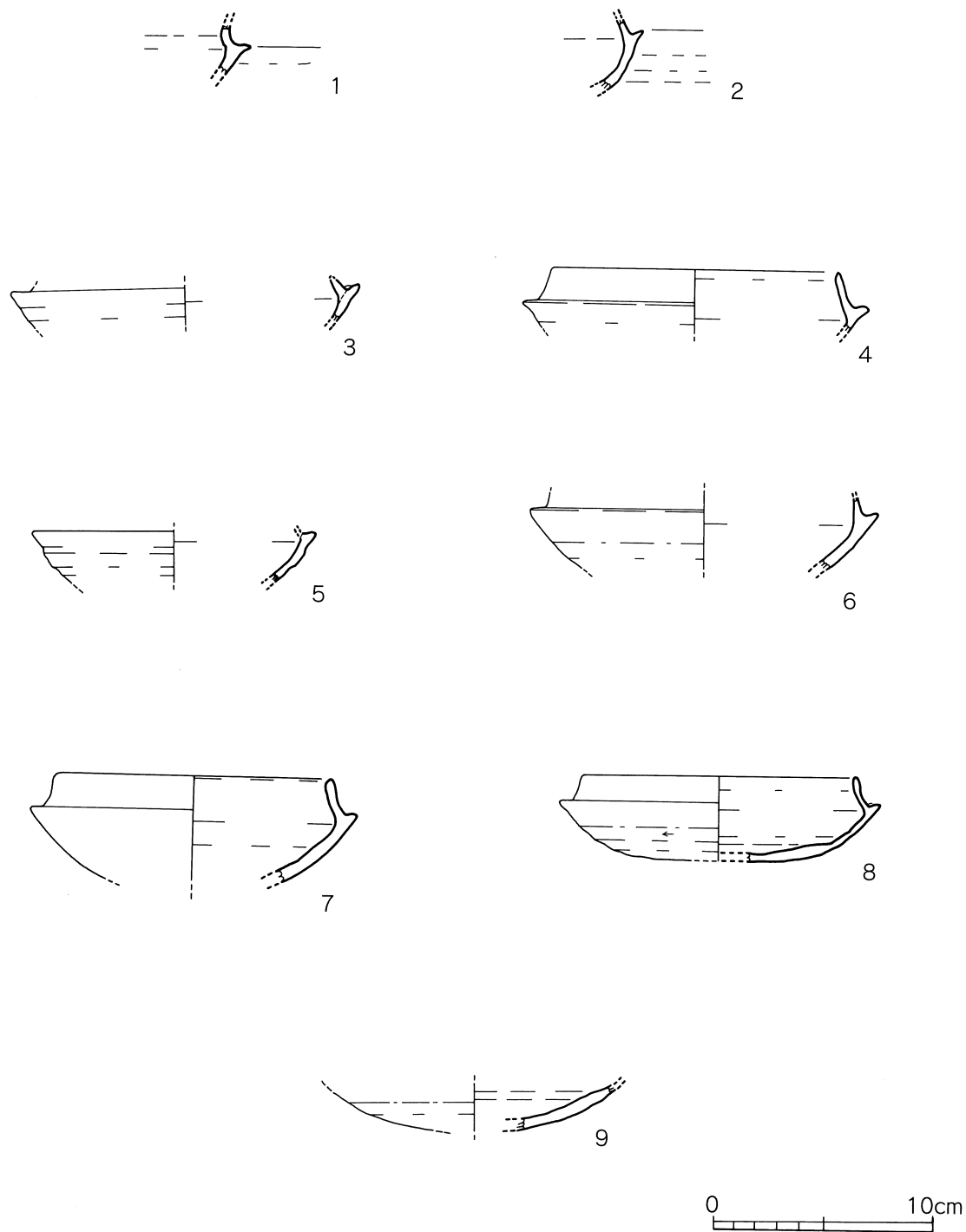
第18図 東大道遺跡A地区 出土遺物 実測図(2)



第19図 東大道遺跡A地区 出土弥生土器 実測図(3)



第20図 東大道遺跡A地区 出土遺物 実測図(4)



第21図 東大道遺跡A地区 出土遺物 実測図(5)



第22図 東大道遺跡A地区 出土遺物 実測図(6)

第3章 まとめ

縄文時代

包含層からの遺物の出土量は少なく、まばらである。後世の削平に伴い遺物包含層も薄く、明確な遺構も確認できなかった。

弥生時代

弥生時代の遺構として、溝が2条検出された。これらの遺構は出土土器から弥生時代後期と考えられる。SD01は調査区を南北に横断するように掘り込まれており、南側は削平により消滅している。SD02は調査区の斜めに横切る形で掘り込まれており、SD01よりは残りがいい。これらの溝は上野台地から染み出る水を給排水するための施設と考えられる。

東大道遺跡B地区では同様に弥生時代の溝が検出されており、これは上野台地の裾を巡るように掘り込まれている。当調査区の溝の状況とは少し違うが、これは遺跡の立地の違いによるものと考えられる。

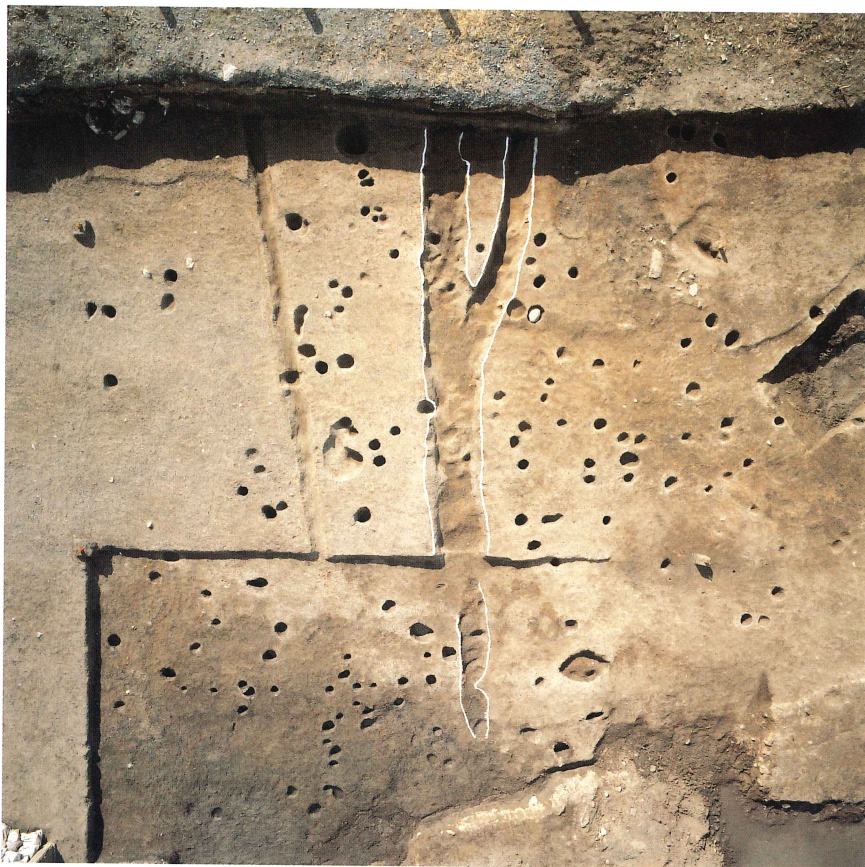
古墳時代

調査区の西端で検出した竪穴住居跡の時期は出土遺物から5世紀中葉と考える。遺構は後世の攪乱により削平されている部分もあったが、支柱穴2本が確認でき、遺物もまとめて確認できた。住居跡は一基のみしか確認できなかったが、周辺に古墳時代の集落が展開していた可能性を示唆するものといえるだろう。

写真図版



東大道遺跡A地区 上空から



東大道遺跡A地区 SD01



東大道遺跡A地区 SD02



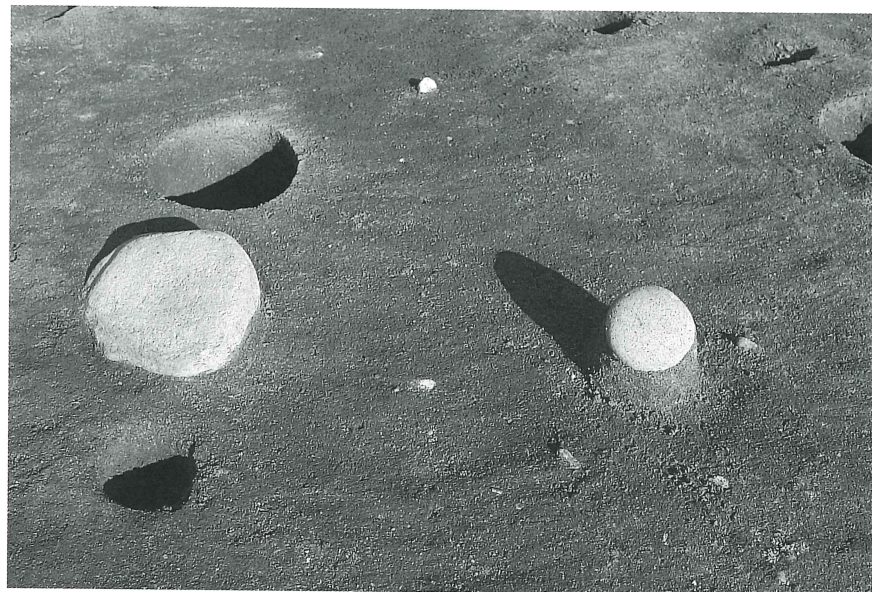
東大道遺跡A地区 SX01



東大道遺跡A地区 SX01完掘状況

図版4

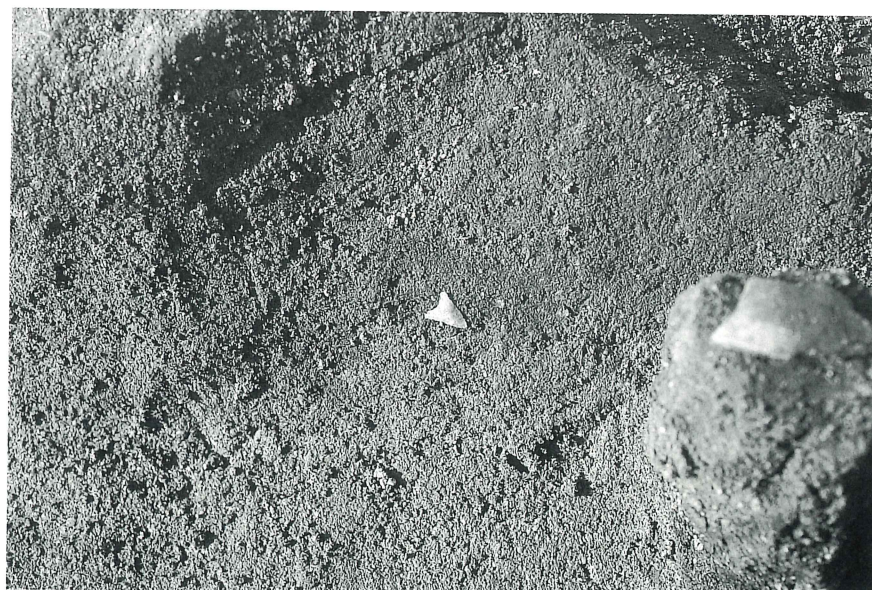
東大道遺跡A地区
擦石・擦皿出土状況

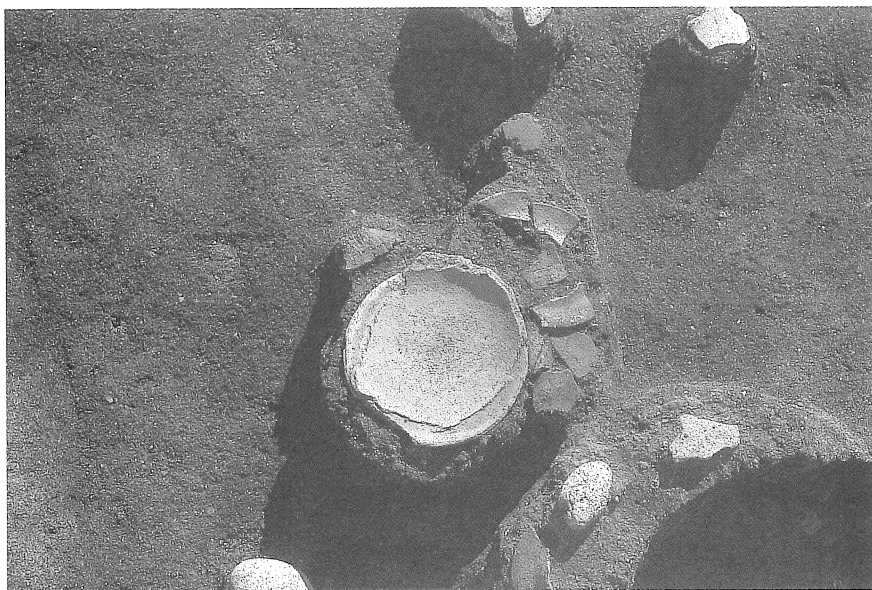


東大道遺跡A地区
轟式土器出土状況

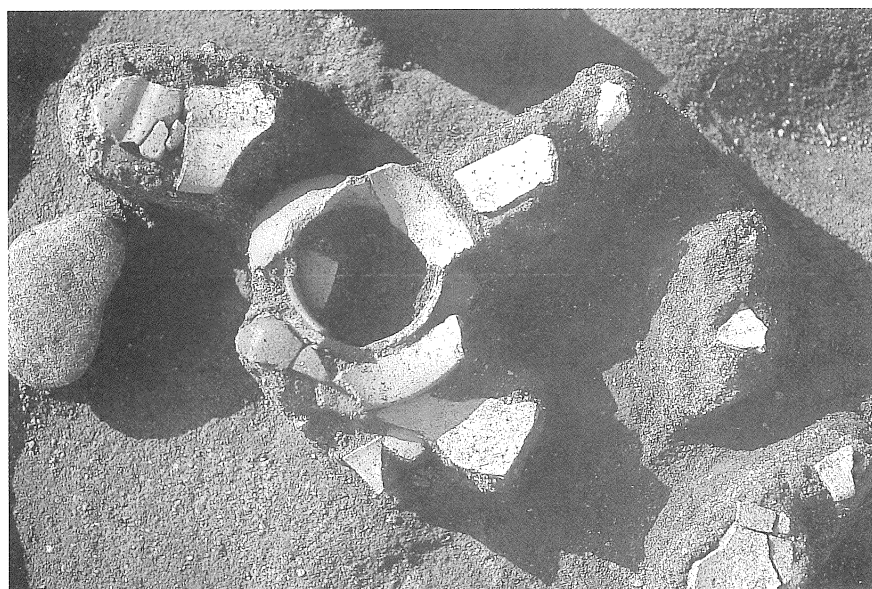


東大道遺跡A地区
SD02石鏃出土状況

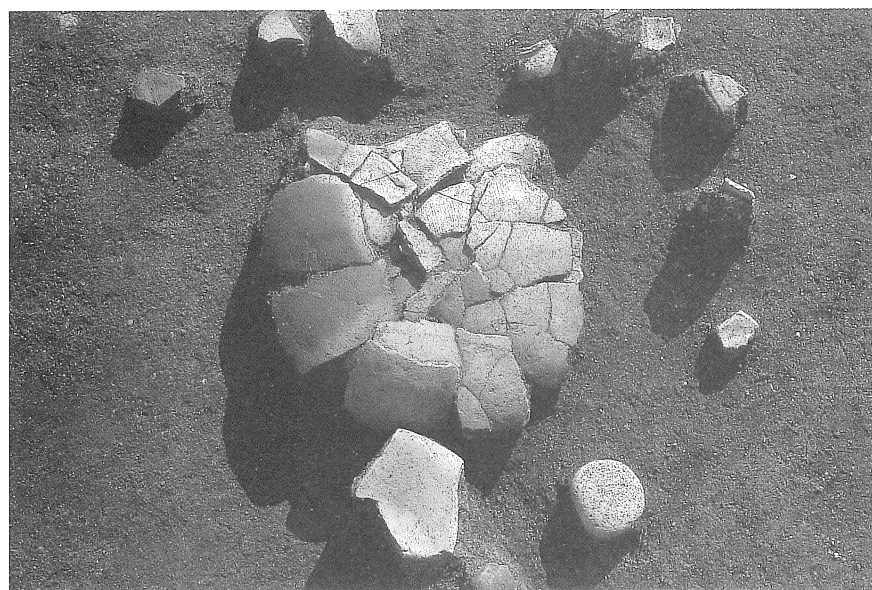




東大道遺跡 A 地区
SX01土器出土状況



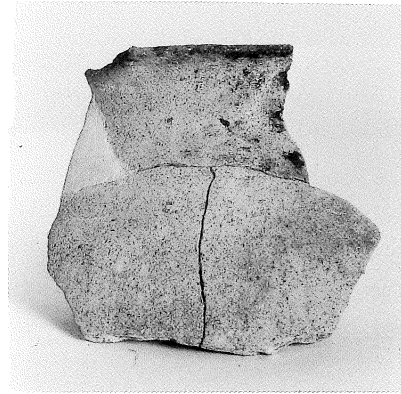
東大道遺跡 A 地区
SX01土器出土状況



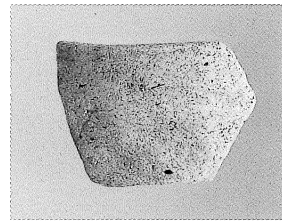
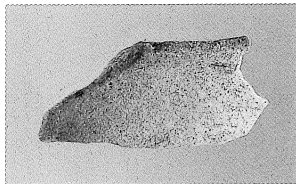
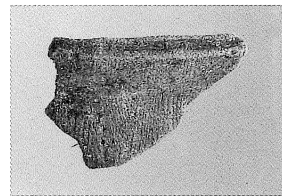
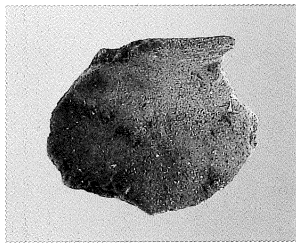
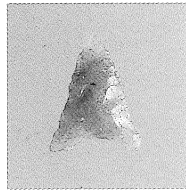
東大道遺跡 A 地区
SX01土器出土状況



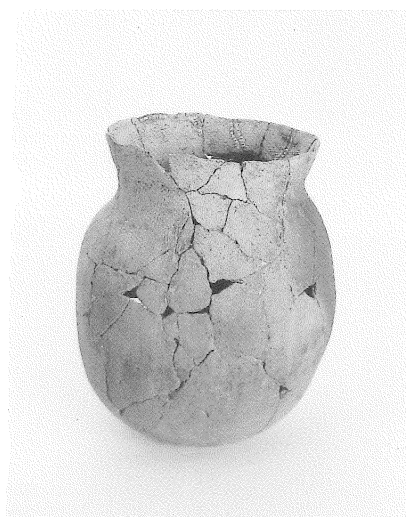
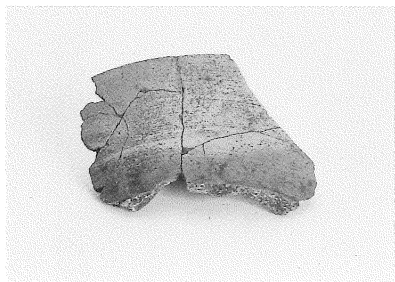
東大道遺跡A地区出土 縄文土器



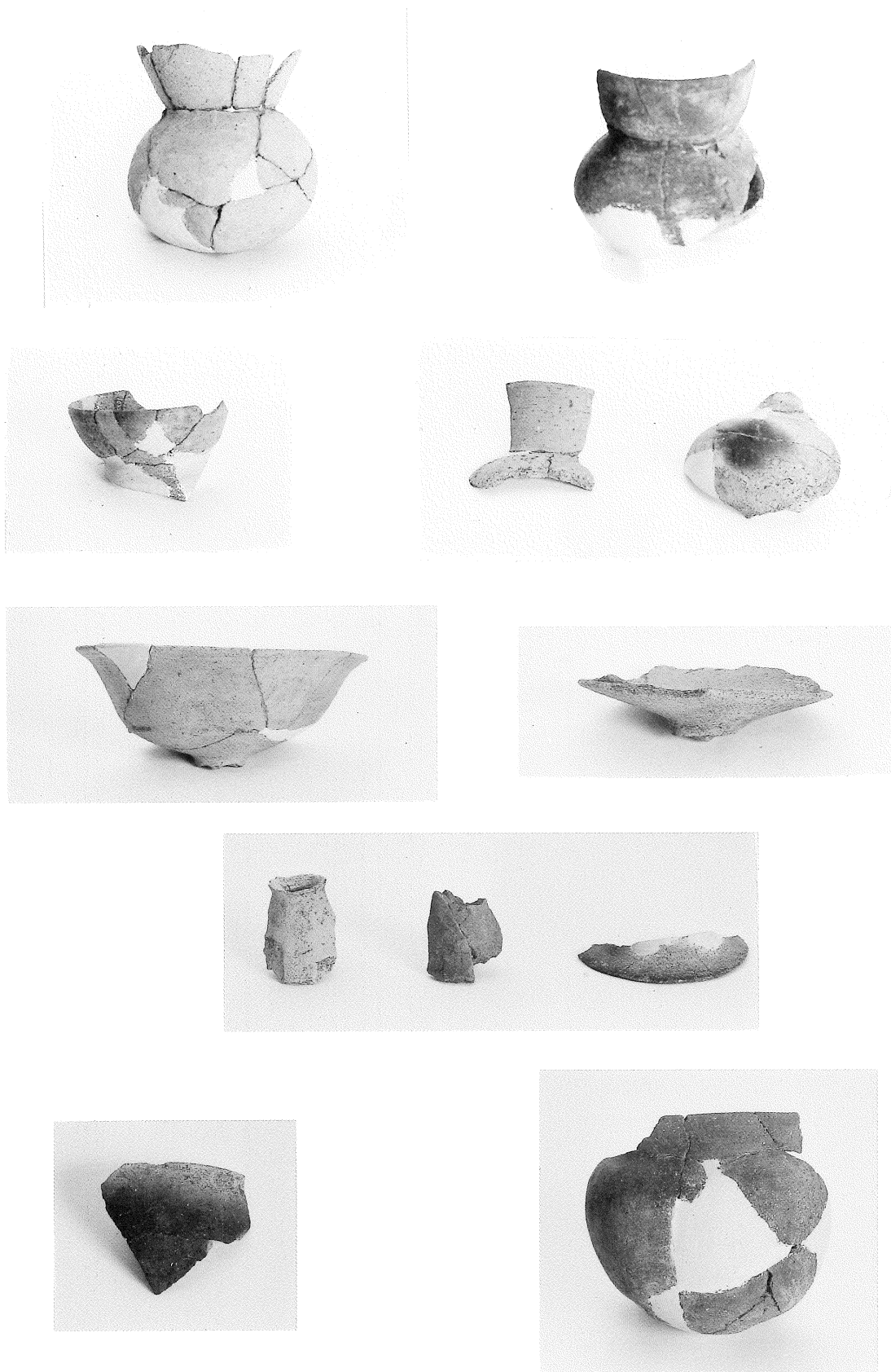
東大道遺跡A地区 SD01出土遺物



東大道遺跡A地区 SD02出土遺物



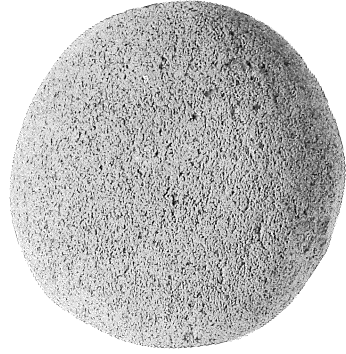
東大道遺跡A地区 住居跡(SX01)出土遺物



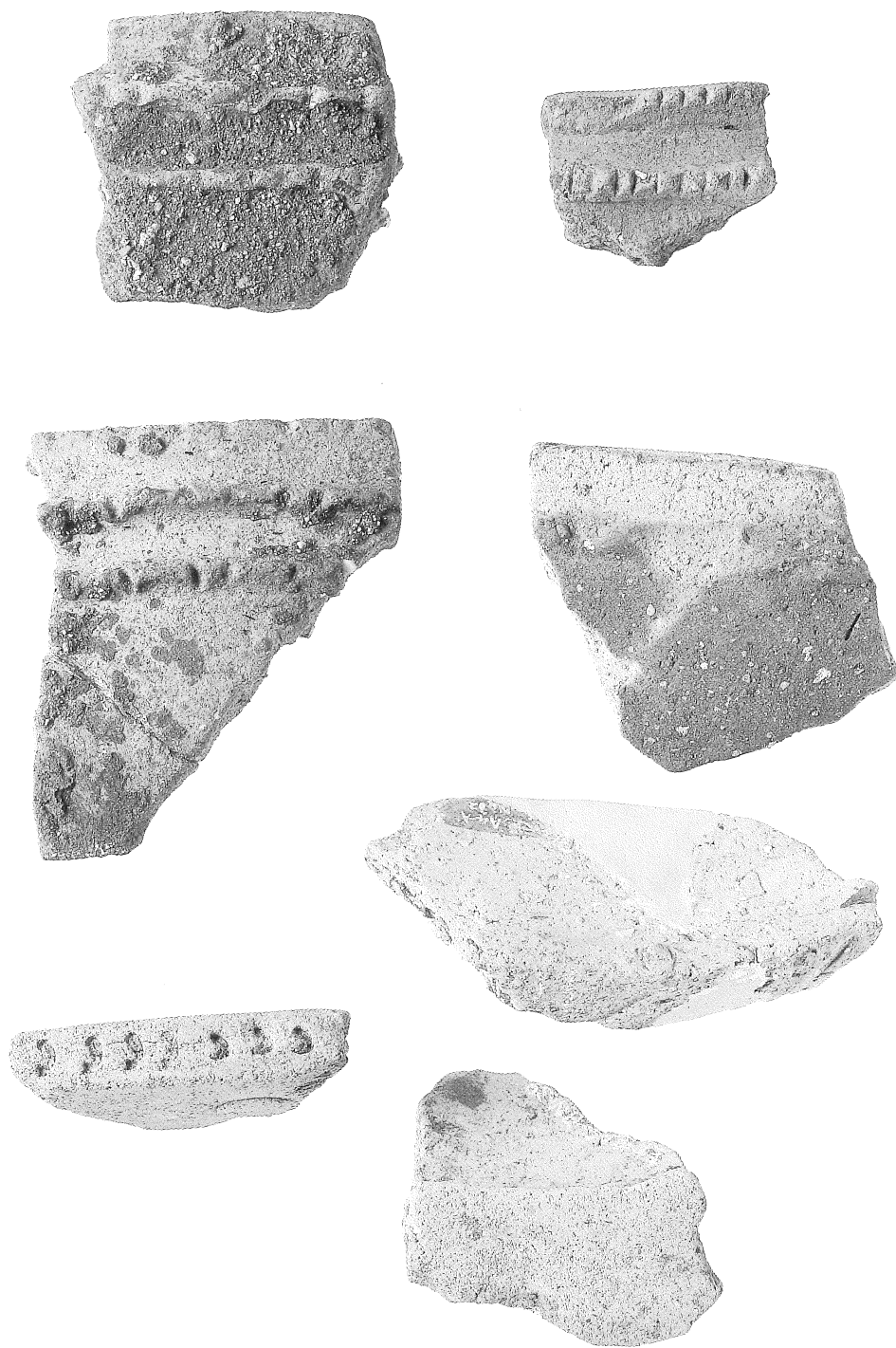
東大道遺跡A地区 住居跡(SX01)出土遺物



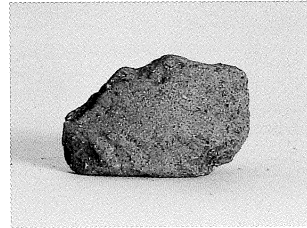
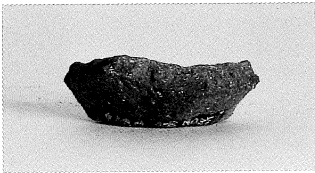
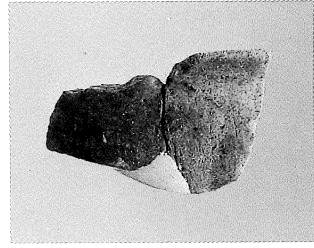
東大道遺跡A地区 出土石器(1)



東大道遺跡A地区 出土石器(2)



東大道遺跡A地区 出土遺物(1)



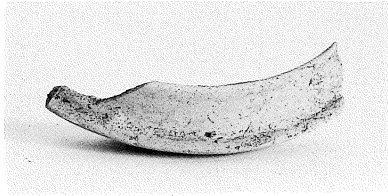
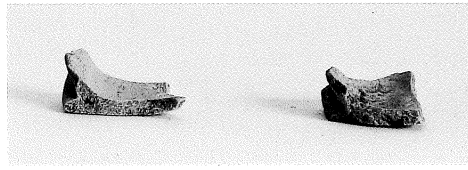
東大道遺跡A地区 出土遺物(2)



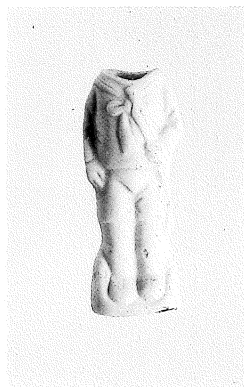
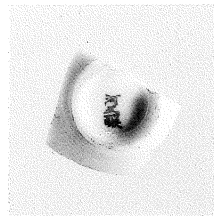
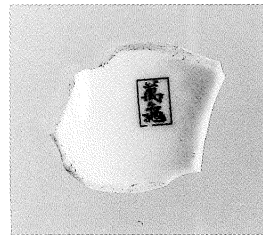
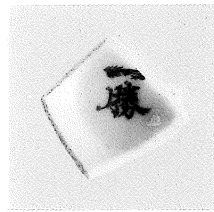
東大道遺跡A地区 出土遺物(3)



東大道遺跡 A 地区 出土遺物(4)



東大道遺跡A地区 出土須恵器



東大道遺跡A地区 出土陶磁器

報 告 書 抄 録

ふりがな	ひがしおおみちいせきAちく							
書名	東大道遺跡A地区							
副書名	庄の原佐野線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	(2)							
シリーズ名	大分県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第166輯							
編著者名	槇島隆二							
編集機関	大分県教育委員会							
所在地	大分市府内町3丁目10番1号							
発行年月日	平成16年(2004年)3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひがしおおみちいせき 東大道遺跡 Aちく A地区	おおいたけんおおいたし 大分県大分市 ひがしおおみち3ちようめ 東大道3丁目	442011	337-1	33°13'27"	131°36'14"	011101 ~ 020131	800m ²	庄の原 佐野線 建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
東大道遺跡 A地区	包含層・ 散布地	縄文・弥生 古墳		弥生…溝 古墳…住居跡		縄文土器 弥生土器 土師器・須恵器 姫島産黒曜石		

東 大 道 遺 跡 (A 地 区)

庄の原佐野線建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

平成16年3月31日

編集
発行 大分県教育委員会
〒870-0021
大分市府内町3丁目10番1号
TEL 097(536)1111
印刷 九州凸版印刷株式会社
